

堺市0-157学童集団下痢症 追悼文集



第1回 堺市0-157追悼と誓いのつどい
(平成10年11月28日)

堺市健康づくり推進市民会議

大切なあなたを忘れない

堺市0—157学童集団下痢症における

追悼文集発刊にあたって

堺市健康づくり推進市民会議

会長 樋上 忍

平成八年七月に発生した0—157学童集団下痢症から今年で十五年が経ちました。九千五百二十三人の患者と三人の尊い命が失われ、今なお後遺症に苦しんで居られる方がいます。わが町堺ではこの事件を忘れることなく、教訓として後世に伝えていく責務があるというこ

とで、追悼の文集を発刊することになりました。

平成九年四月二十八日、集団下痢症の教訓から、市民の健康づくりを更に推進する為に堺市健康づくり推進市民会議が発足しました。現在二十一団体に構成され、「0—157追悼と誓いのつどい」をはじめ、食中毒予防キャンペーンの実施、健康づくり講演会、新健康さかい二十一健康フェアの開催と堺大魚夜市、堺市民駅伝競走大会、堺市民マラソン大会等への後援・協賛等の活動を行っています。

0—157病原性大腸菌は細菌が出すペロ毒素により出血性の腸炎を起こすことから腸管出血性大腸菌と呼ばれています。

1982年にアメリカでハンバーガーが原因となった食中毒の時に

発見され、研究の結果、新しい菌であったので、1983年に背番号が付けられました。0—157は157番目に見つかった菌でペロ毒素を出す腸管出血性大腸菌としては0—157の他に、0—26、0—103、0—111、0—128、0—145等が知られています。

昨年はヨーロッパでも猛威を奮い、我が国でも生レバーによる食中毒事件がありました。毎年、食中毒事件が起こって居り、いつどのような形で起こるのか分からない病原性大腸菌に対し、私達は、食中毒予防の三原則(付けない、増やさない、殺菌する)を常に念頭に、食材の調理をする必要があります。

この文集ではこういった0—157に関する知識と啓発も掲載することにしました。

わが町堺は中世には自治都市として栄え、創造と伝統が、今日まで受け継がれてきました。この歴史の息づく町を大切に、市民の皆様が生涯にわたって健康とともに生きることのできる健康都市堺をめざして、お互いに頑張っていこうではありませんか。

平成二十四年三月

目次

堺市0―57学童集団下痢症における追悼文集発刊にあたって	
堺市健康づくり推進市民会議 会長 樋上 忍	
寄稿文	1
大切なあなたを忘れない	
堺市健康づくり推進市民会議 副会長 山口典子	45
資料	
「堺市0―57学童集団下痢症 追悼と誓いのつどい」について	53
堺市0―57学童集団下痢症事件	54
堺市0―57学童集団下痢症発生からの経過	55
堺市健康づくり推進市民会議について	59

堺市0-157学童集団下痢症を顧みて

前堺市医師会会長 岡島慎治

今から十五年前の夏の堺市において、未曾有の0-157学童集団下痢症が発生しましたが、市民の皆様は、いまだに記憶に残っているのでしょうか。今一度ふりかえり、事態の深刻さを顧みたいと思います。

1、0-157学童集団下痢症の発症について

平成八年七月の暑い日に、堺市東部の小児科医から下痢、腹痛を訴える児童が、続々と医療機関を受診、治療を受けているという報告があった。それと同時に、宿院、泉北急病診療センターに続々と受診しオールナイトとなったため、医師四名に増強し対応した。その後も、食中毒患児は増加し、流行の終わりのころには、九千五百二十三名の患児となり、三名の児童の尊い命が奪われるという最悪となった。

2、集団下痢症の発生に対して行政、医師会の対策

この病原性大腸菌による下痢症の発生に対して大阪府医師会対策本部、堺市対策本部、堺市医師会対策本部を設置し、入院受け入れ可能病院の確保に努力し、小児科標榜の診療所の休日、夜間の診療所の開設に努力した。

以上の対応により、泉北急病診療センターには七月十四日には四百九十四名受診治療し、宿院急病センターには同日三百五十九名の受診治療した。多くの患児が受診したにも拘らず、事故もなく経過したことは、出務医師のお蔭であり、又、冷静なる患児さんのお蔭であると

感謝しております。

3、貝割れと0-157のDNAとの関係

公衆衛生研究所の検便では、二十六検体中、十三検便に大腸菌0-157が検出され、これが食中毒の原因菌と考えられた。大阪羽曳野の老人ホームにおいて、食中毒患者から大腸菌の0-157のDNAパターンと堺市有症患者の大腸菌のDNAパターンと一致したが、徹底的調査をした結果、汚染源、汚染経路の特定はできなかった。これらの原因食材として、貝割れ大根が最も可能性が高いと考えられたが全ての検体から病因菌が検出されなかったため原因食材の断定には至らなかった。

4、堺市健康づくり推進市民会議の設立

故幡谷元堺市長さんのご提案によって堺市民の健康づくりを積極的に推進し、健康都市堺を旨とす「堺市健康づくり推進市民会議」が、平成九年四月に設立された。設立の趣旨は、市民の立場で自らの健康を自ら創ることを基本に、堺市健康づくり推進市民会議に賛同された堺市内の二十二団体の力を結集して、市民の先頭に立って健康都市堺を進めることを念願している。平成九年四月に、第一回健康づくり推進市民会議が行われたが、ご遺族の参加がなく、祭壇に亡くなった学童さんのお写真もなくさびしい限りでした。ご遺族の参加がない事は医療に対するご不満があるのではないかと憂慮しております。ご遺族の参加のない市民会議は残念なことに、後世の人に語り伝えられなくなるのではないかと憂えております。

0—157 追悼文

佐村木 正和

堺を震撼させた0—157事件から、十五年が経過しました。私の校区でも、尊い命が犠牲になりました。最も安全で信頼をおいていた給食が原因ということで、子どもを持つ親は、無力感に襲われました。しばらくの間、原因がわからない中で、目に見えない「菌」との戦いに、子どもが触れるものすべてを消毒することに、我が家もなりました。

堺市のこの大きな事件により、日本中で0—157は知られることになりましたが、その後も毎年どこかで、0—157の食中毒事件は発生しています。少しの油断が、この生きた菌を食材の中に入れてしまうことになります。

堺市では、給食の安全に総力をあげて取り組み、すべての食材を加熱調理するということの徹底を図ってきました。これはある意味当然のことだと思えます。給食に関わるすべての方が、この見えない敵に対して日々格闘されていることでしょう。

この事件の犠牲や被害に遭われた多くの方々のお気持ちを察すれば、二度とこのようなことが起きないようにしてほしいということだと思えます。しかし、ただただ安全で菌の入っていないものの提供のために、野菜や果物やジャムに至るまで加熱さえすればいいという変な割り切った考えが浸透していないでしょうか。安全であることは当然として、その上で、全国に誇れるおいしい献立の提供をして、いい意味で堺の給食が全国から注目されることになることが、多くの方々の望

むことだと思えます。

安全で、おいしく豊かな「食」を提供するために、献立の工夫や、調理手順の徹底などソフト面の取り組みはもちろんのこと、食器の種類や温蔵庫の設置等ハード面の課題はまだまだ遅れているのではないのでしょうか。給食費も全国でも最安水準の中、「安全」以外の多くのことは、なかなか目を向け、手をつけることになっていない様に思います。

現在、子どもに給食を食べさせている私たち保護者にとって、この事件により犠牲や被害に遭われた方々の苦しみや思いに寄り添うことを忘れがちになってはいないでしょうか。十五年を経過したこの長い時間は無関心と諦めを醸成させてしまったようにも思います。子どもに「安全」で「おいしく」「豊かな献立」を目指して、もう一度、あの事件のことに思い遣って、給食に大きな関心を払い、何段も上のレベルの誇れるものにして、子どもを笑顔にすることが私たちの務めだと思えます。

M・T

加藤 静子

十五年前、娘は小学六年生。ニュースで0-157のことが流れ心配しましたが、娘の通う学校では感染者が一人も出ずほっとしたもの他校では多勢の子ども達が苦しんでおり早く回復してほしいの感染がこれ以上広がらない事を願っていた事が思い出されました。

ただ0-157の場合は、症状が良くなったというだけでは終わりませんでした。堺市というだけで、子ども達が楽しみにしていた子ども会の行事である遠足が中止になり、一人も患者が出なかったにもかかわらず子ども達が集まる事を禁止された為、夏休みのラジオ体操も中止になり子どもたちにとってさみしい夏休みになってしまいました。「堺」と聞いただけで「大変でしたね」ではなく恐れられてしまうのは、多くの人が0-157についてあまりに知らな過ぎた結果ではないでしょうか。

正しい情報を早く知りやみくもに恐れなくて正しい対処の仕方を知ることが大切ではないかと思いました。

ニュースを聞いて、はじめて知った病名で、私には何も解らなかつた。普通に云われている、病原性大腸菌と同じように、排便後の手洗い、加熱調理で充分防げると思っていました。発症者が急激に拡大し、しかも重篤な症状になり、死者を出すなど驚きでした。

いつとは憶えていないのですが消毒用のアルコールと逆性石鹼が配布されました。それで下着の消毒をはじめました。

十五年も過ぎていたとは思えない程、まだまだ最近の出来事のように思われます。被害に遭われた方々は、大変な思いをされた事でしよう。又、今尚副作用で苦しんでいる方々に国や堺市の行政の手がささえてくださる事を望みます。自分で出来る事は自分で自分の身を守るのみです。病原菌について勉強する。

無 題

中 島 幾 恵

”がんばっていた女の子が亡くなったらしい“世間では〇―57の報道が落ち着いた冬にそのニュースを私は知りました。

あの夏、私は亡くなった女兒と同じ公団住宅の別棟に住んでいました。

あの日を境に私達をとりまく環境が姿をかえました。

報道されていた様に街から子どもたちの姿が消え、私の様な幼稚園にも満たない子どもを抱えている親は、園や学校からの情報が入らず、無機質に投函される公報の類を目を皿の様にして読んだ事を思い出します。

また、デマや噂も数多く飛びました。”スイミングスクールが危ない“、”回復しきっていない児童が通っているらしい“等々。少し考えれば落ちついて判断できる様なデマや噂に一喜一憂したものです。何故そんなデマや噂を信じ、時には差別につながる行動が起こったのか？その理由の中に、”無知“そして、”油断“があるのではないかと思えます。

今、〇―57は、牛の腸の中にあたり前の様に存在し、そして加熱には弱いという事が知られています。

当時を振りかえると〇―57の予防の方法は充分に報道されず、被害にあわれた方々の重篤さや、かわれ業者を責める報道に多くの時間が費やされた様に感じます。

まず、”知る“事、これがスタートです。思い込まず新しい情報をちゃんと知る事は、被害の拡散防止以外にも、要らない差別をうまない為にも必要です。

そして”油断“、あの時も、”今まで冷蔵庫なしで大丈夫だったから“、”予算がない“、そんな命とは比べ様のない理由で冷蔵庫に入れられず食材は放置されていたのです。

冷蔵庫に入っている〇―57は発症したかもしれませんが、あたり前の事をあたり前にする感覚を失っていた事が大きい様に思います。悲しい事に今年の春、富山の焼肉屋で再び〇―57の被害が出、命がうばわれました。あれから十五年、私達は何を学んだのでしょうか？今だに、小学校ではサラダ等の生ものは出ず、フルーツの缶詰さえ加熱した状態で出てきます。〇―57で尊い児童の命がうばわれたことを私達は決して忘れない、いえ堺市民として忘れてはいけません。

大切なお子さんの命を安心して預けていた教育の場であられた遺族の方々の想いは、十五年と言う月日が流れても、何らうすれる事はないでしょう。そんな悲しい思いをする人を二度とうまない様、しっかり伝えて、そして気づいた事には声をあげていこうと思えます。

二度と教育の場でこんな悲しい事がおこりません様に、全ての親の願いです。

無 題

中 里 裕 子

そういえば十五年前、大阪浪速区に住んでいました。主人の仕事の失敗で、愛媛から一から出直そうと出て来て、四年目の事です。職業訓練校へ行き、一般事務コースを受講中だったと記憶します。先生の話す中で、「〇―57」の事件を知りました。その後、テレビをつけるたび、事件と、ふくれあがる人数の多さにびっくりしたものです。その時は、他人の不幸を我が身の事のように感じる余裕もなく、反省の至りです。食は命をつなぐものだからよく洗い、よく熱を通そうと思っただけです。

当時、何とか訓練校を卒業したものの、バブルもはじけ四十半ばの私を雇ってくれるのか、仕事があるのか、不安でしたが、幸いにも高齢者の雇用の促進という事で思いかけず、大企業の総務に使っていただけ事ができました。そして四年後に堺へ来て、〇―57で堺の方が亡くなった事を知ったものです。カイワレを食べてたパフォーマンスだけが残っています。今思えば無知だったと反省しています。

今年、東北の大震災があり、命の大切さを痛感するにつけ、天災から人災に変わりつつある現状をみて、この「〇―57」も人災だったのかもしれないと思います。

私も人生の転機を何度か味わいました。四十半ばの勉強もそうでしたが、ピンチをチャンスに変えたものです。このたび、追悼メッセージとして勉強させていただくチャンスを受け、堺の女性はスバラシイ

と思う事と、お亡くなりになった方の死を無駄にしない為にも賢くなり、行政もこういった観点からどう対応していくか私達が声をあげなければいけないと思います。

堺市〇―157学童集団下痢症について追悼文

上 原 尚 広

事件発生時、子どもや孫たちが小学生であって大変心配したが、幸いいずれも無事過ごすことが出来てほっとしたことでした。当時は厚生大臣であった菅さんの失言もあり大変なことでした。私の印象としては、おおさわぎをして多数の関係者が処置をした結果、まもなく終息したのですが、あとあじのわるい感じが残ったままのような気が致します。というのも、当時の教育長の責任のとり方、下痢症に対する原因対策が明確に公表された印象がないこと、さらにとられた処置対策が具体的に公表されなかったのではないかと、問題点を明確にし公表することは再発防止のため、絶対必要であるの言うまでもないのに、十五年過ぎた今になって、幸い再発されていないが、当時おおさわぎされたわりにこのような終息のしかたでよかったか十分な反省をすることともに対策処置について再確認されることを願います。

0—157学童集団下痢症が起きて

麻野 光恵

平成八年を振り返ると、0—157による食中毒が、五月に岡山県で起きていたのですが、気の毒には思いながらも遠地なので、あまり気に留めていませんでした。その後、七月、私が住む町、堺市の学校給食で、学童集団下痢症が起こってしまい、0—157の名前をくわしく知ることになりました。

0—157に関するニュースを連日、テレビや新聞で見聞きし、近所の人と話しをするなどしていました。この時代に、学校の調理場に冷蔵庫が無いということ、夏期に朝とは言え食材を放置するなんて：私自身も驚きの連続でした。

その当時、私は、地域の方の健康づくりを目的に活動するボランティア団体である堺市健康づくり食生活改善推進協議会に入会していましたが、私たち会員も検便を受けた記憶があります。当時の役員さんたちは大変な思いもされたと後で知りました。

この追悼文集を作成するにあたって、食中毒予防の大切さを皆で再確認するよい機会だということで、当協議会理事会で、話し合いを行いました。

- 一、調理前の手洗いの徹底と流し台や食器・器具類などの清潔の保持。
- 二、魚介類・肉類などの取り扱いには特に注意し、野菜も含め、購入したらすぐに適切に保管し、早く調理する。乳製品も冷蔵庫等で適切に保管し、早めに使う。賞味期限や消費期限の確認をし、購

入、適切に使用する。

三、地域の人々への食中毒予防キャンペーンなど啓発活動に協力する機会があれば引き続き行う。

四、0—157を含めた食中毒について、食中毒多発期を考慮した学習を皆で引き続き行う。

五、保育所、幼稚園、小・中学校、子育てサークルなどへの食育啓発活動などで訪問した際には、手洗いの大切さと食中毒予防などの啓発を引き続き行う。

学校給食では、今でも生野菜や生の果物は使用されていないなど、食中毒予防の徹底がされると聞きます。無邪気な笑顔のかわいい児童たちに再び同じことが発生しないように願うばかりです。私たちも今後も食中毒予防に取り組んでいきたいと思えます。

「今、考えなければならぬこと」

(匿名)

十五年前の平成八年七月、学校給食に起因するO157学童集団下痢症が発生し、三人の尊い命が亡くなり、九〇〇〇人を超える子どもや家族が罹患し、地域の医療機関に次々と運び込まれるという未曾有の事態が発生した。

腸管出血性大腸菌O157は、今まで私たちが経験したことのない食中毒で従来の食中毒とは異なり、二次感染をともなうということから過剰な健康管理を含めさまざまな憶測が飛び交い、私たちに大きな心配や不安が広がっていた。

そんな混沌とするなか、許されざるさまざまな人権諸問題が起こったことが鮮明に記憶に残っている。

とても辛く、苦しくやりきれない症状のあった子どもが、やっと回復し学校に行く。「うつるから、そばに近寄るな」といじめられたり、「堺市の方は宿泊をお断りさせていただきます」と露骨に宿泊を断られたり、さらには「もう明日から来なくていい」と勤務先から退職や休職を言い渡されたりと、驚くべき事態がああ時に起こった。

この背景には、あまりにも事態が大きかったこと、そして指定伝染病として指定されたことを受け、二次感染の防止や予防への様々な対策をマスクミが連日のように取り上げ、かえって私たちに不安を煽るようになっていたことがあげられる。

今から考えると、「そんなことがあっていいのか」と思うことはか

りであるが、しかし一昨年の大流行になった新型コロナウイルスにおいても、同じような許されざる人権諸問題が起こったことは記憶に新しいところである。

近年、私たちを取り巻く環境は驚くべき速さで変化し、人と人の結びつきがどんどん希薄化し、人に対しての思いやりや優しさなどについて考えるべきことが山積している。

昨年三月に起こった東日本大震災において甚大な被害が発生し、多くの尊い命が奪われた。被災地では人の優しさと思いやりが形となり、壊滅状態の街の復興に向け日本中が「がんばろう東北、がんばろう日本」と互いに助け合い、強く人を思いやる、たくさん人の「絆」が生まれた。

これほど人と人の「絆」が明確に表出されたことがあっただろうか。人は一人では生きていけない。人と人の「絆」を大切に、今こそ私たち自身、改めてさまざまな機会において「絆」を見直してみる必要があるのではないだろうか。

「あの夏を振り返って」

小学校教諭

平成八年。今から十五年前の七月。ちょうど一学期末のまどめのテストの丸つけや個人懇談会の準備を進めていたところに〇―57学童集団下痢症は発生しました。私はその四月に転勤をし、新しい学校での一年目を過ごしていたところでした。転勤一年目というのは、環境が変わることもあり、何をするのも勝手が違い、緊張感があるものです。五月に家庭訪問を行い、校区の様子を知り、子どもたちの遊び場などを知ってようやく慣れてきた、そんな頃だったように記憶しています。

集団下痢症の知らせは突然入ってきました。七月十三日が土曜日であったことから、事態の詳細は職員集合のための電話連絡で知ったように思います。当初は「食中毒」という情報でしたし、「腹痛・嘔吐」の症状があるという浅い理解しかしていませんでした。「集団発生」という事態の深刻さがピンときませんでした。それは、担任をしていた子どもに症状がなかったことも一因ですが、「今までにない事態を理解することができなかった」ということが一番大きな理由だったのではないかと思っています。

その後、子どもたちの生活は一変しました。外出は極力禁じられ、市民プールは使用できず、子どもたちは家にこもらざるをえなくなりました。いつも以上に長くなった夏休み中、家庭訪問し消毒液を配る自転車をこぎながら見かけた、子どもの姿がなくセミの声だけが空し

く響いていた公園の姿は、非現実的で違和感のあるものであったことを覚えていきます。

あれから十五年。当時小学生だった子どもたちは、社会人となり、親となる世代となっています。親自身の体験から、「給食が怖い」という思いを子どもが引き継ぎ育つことがないように、と願わずにはおられません。食への信頼・学校への信頼を回復するために、弛まぬ努力をしてきていることを私たちはこれまで同様、これからも示し続けることが必要です。

物事には取り返しをつかないことと取り返しをつくこと、取り返ししなければならぬことがあると思います。失った命・健康は取り返しのつかないものです。詫びること、再発防止を約束することでは代えられないものでしょう。しかし、亡くなった方のことを忘れまい、その方々に胸を張って生きていこうという強い意志はつないでいかなければならないものだと思います。今もまだ、私たちのことをきつと見つけ続けてくれる御霊の視線をまっすぐに見つめ返すことができよう、教育に関わる私たちは、食の安全・学校の安全を取り戻すために一路邁進していかなければならないと思っています。

追悼文を寄せるにあたり、食を通じた命についての教育を進め、危機管理意識を高く持ち続けるという決意を新たにする機会とさせていただきます。ただたく筆をとらせていただきました。

学童集団下痢症0—157事件を振り返って

元学校給食調理従事一職員

光陰矢の如しとは申しますが、月日が経つのは本当に早いものです。平成八年七月に起こった0—157食中毒事件、あれから十五年が経過しました。

学校給食を起因として大勢の子どもたちが下痢や血便などで苦しみ、かけがえのない三人の幼い命が犠牲となりました。そして、今なお後遺症で苦しんでおられる方もいます。

当時、学校給食調理に従事していた一職員といたしまして、心からお詫び申し上げます。

子どもたちの命を奪い、将来を奪った0—157、亡くなられた子どもたちの無念さを思うと……、ただただご冥福をお祈りするばかりです。

また、最愛の肉親を失われたご家族は、十五年経過した今もなお、深い悲しみに暮れておられることと思います。

被害があまりにも大きくかつてない事件が起こり、学校給食が起因していたと聞いたときに、私自身、止めどもなく涙が出たことを今も鮮明に憶えています。それからというものは、心を痛め、身体から気力も抜けてしまい、自分を責め続ける毎日で、いつしか言葉数も少なくなってしまうていました。

0—157が原因で職場を去った仲間もおりました。正面を向いて進むことができなくなってしまったようです。

私は、既に退職しておりますが、あの事件については一生忘れることはできません。というより、私が忘れてしまうというようなことは、決して許されるものではありません。私だけではなく、教育に係わる職員として、これから先もずっとあの悲惨な事件を伝えていかなければならないと思います。

風化させるようなことがあってはなりません。

現在、学校給食調理業務については民間委託化されていますが、委託業者も含め学校給食に関わるすべての方々に、是非ともお願いしたいことがございます。

子どもたちが一日の学校生活の中で一番楽しくて笑顔の絶えないのが給食の時間です。子どもたちは、給食を日々心待ちにしている、そのためにも信頼しきって食べてくれます。安心安全でおいしい給食を子どもたちに食べてもらうために、細心の注意を払い、真心のこもった給食をこれからもつくってあげてほしいというのが、私からの切なるお願いです。

追悼

小学校養護教諭

当時、私は、子どもたちとの二泊三日の宿泊学習を無事に終え、休日の朝をゆっくり過ごしていました。その時、テレビの画面から「堺市で児童が下痢症状で多数、病院に運ばれている…」とニュースが流れ、大変な事が起きているという事だけが解り、不安が大きく深く広がりました。家族からも「ニュースの度に患者数が増加している。勤務している学校の子どもたちは、大丈夫か」と聞かれました。その後、学校からの緊急連絡が入りました。

それからは、何が何だかわからないまま、数日が過ぎ、子どもたちの顔を見ることなく、夏休みを迎えることになりました。

学校教職員は、家庭訪問、子どもたちの健康状態の確認、啓発文書の配布、消毒液の配布、便検査の準備・検査・結果報告、学校再開に向けての準備とあわただしい毎日を送りました。教職員が子ども命に関して懸命に考え対応した夏となりました。幸いにも、私の勤務する学校は、発症者はいませんでした。

二学期、子どもたちが学校に登校した姿を見た時には、本当にうれしく思いました、それと同時に、「このような事を二度と起こしてはいけない」と心に強く思いました。

あれから十五年が経ちました。現在、学校では、子どもたちの元気な声が校庭や校舎に響いています。その子どもたちの笑顔や元気な声

が永遠に続いてほしいと私は、願っています。

心の片隅に、「当時、罹患した子どもたちは、社会人としてどのようになっているのか」いつも気になっていました。ある感染症の研修会で一緒になった養護教諭さんが「私は、平成八年に〇――57に罹患しました」と話し始めました。参加者は、その先生の発言を真摯に受け止め、感染症対策について「あのような事は、二度と起こさない」という気持ちで一緒に研修を行い、学校園での実践に繋がる研修会となりました。

また、〇――57に罹患した子どもが「健康に関する仕事」を選択してくれた事に感謝しました。

三人の尊い命が失われたことを改めて深く心に刻み、養護教諭として、子どもたち一人ひとりの命を大切にして、子どもの輝かしい未来につなげていくために引き続き渾身の力を傾けていくことを決意して追悼の文とします。

「今も時折考えてしまおう……」

教育委員会事務局の一職員より

○〇―57学童集団下痢症を発生させ、多くの児童や人々を苦しめ、三名の尊い児童の命を奪いました。

職員として、ご遺族の皆様にご詫びし、謹んでお悔やみ申し上げますとともに、亡くなられた児童のご冥福を心からお祈り申し上げます。

○平成八年七月の夏、未曾有の事件が堺で起こりました。

市内小学校に通う多くの子どもたちが学校給食を起因とした病原性大腸菌〇―57に感染し、つらい苦しみや恐怖が子どもたちを襲いました。

○そして、あなた・たちは、底知れぬ苦しみと恐怖の中で逝ってしまいました。

○その日もあなた・たちは、いつもと変わりなく食事を前に手を合わせ、クラスの仲間と楽しく会食していたことでしょう。

何が待ち受けているのか知る予知もなく……。

○起こってはならないことが起こり、多くの人たちを恐怖に陥れた未曾有の「〇―57学童集団下痢症事件」、そして、今もなお後遺症により苦しみを闘っておられる方もいます。

○当時、事件発生後の早い時期から多くの保護者が学校給食の再開を望んでおられました。

○教育委員会は、二学期からの再開にむけて、安全な給食を子どもた

ちに提供するため、八月上旬に保護者をはじめ給食関係者による「学校給食検討委員会」を設置し、検討委員会においては種々議論がなされたということです。

○そして、十一月一日の本市の〇―57安全宣言を受け、給食再開にむけて保護者説明会や給食試食会を開催し、十一月十九日から給食が再開されました。

○様々な観点から十分議論が尽くされたうえの給食再開の決定であったと思っております。

○学校給食を再開するために、それまでの給食システムを根本的に直し、種々の安全体制を確立しました。

○それにしても、事件が起こってから、僅か四ヶ月後の再開でした。○昨今、新聞誌上で「食の危機」に関連した記事を目にする機会が多くなったことからののか、私自身、時折考えてしまうことがあります。

○それは、給食の再開時期がどうだったのかということです。

○給食の再開が、給食によって命を奪われ、将来を絶たれたあなた・たちの目にはどう映ったのか……。

あなた・たちにそのことを聞けるならば聞いてみたかったと思います。

そんなにも早い給食の再開を許してもらえたのだろうか。それとも……
○給食に関わるすべての職員は、給食再開から今日まで、そしてこれから「二度とあのような不幸は繰り返さない起こしてはならない」という誓いを立て、危機意識を途切れさせず、「日々の安全な給食」を持続していかねければなりません。給食が実施されているかぎりはずっと……。

事故発生時、府下の

中学校教員であった一人として

”そのニュース“を聞いたとき、なぜ学校給食で、なぜそんなに多くの人数になったのか、なぜ生命まで……、多くの疑問を持ったことを覚えていて。何よりも、三人の生命が奪われたことは、教育に関わる者の一人として終生、心に深く刻み続けなければならぬと感じた。悪化する状況、症状の詳細が逐次報道され、そこに映し出されたご家族の表情は不安や悲痛、怒りなど形容し難い感情がない交ぜになったようだったと記憶している。

しかし、十五年以上経った今、自分の心はどうかと問い直したとき、当時の感覚を維持できているとは言えないことに気づく。後遺障害に苦しむ子どもたちや、最愛のお子さんを奪われたご家族の心が癒えることはないだろうと推察することさえなくなっている。

今年、「想定外」という言葉がクローズアップされた。

十五年前のあの事故以降、私たちの想定範囲は広がったのだろうか。広がったとして、それで十分なのだろうか。どちらの問いにも答えは”否“である。この間、どれほどの子どもたちが全国で犠牲になってきたのだろうか。十月に小学校で起きた転落事故も、私たちの想定が足りていないことを示している。その結果、今回もまた尊い生命が犠牲になった。十五年前に”二度とこのような不幸を繰り返さない“と誓ったとき、どのような不幸を想定していたのか。食中毒のことだけだったのか、と問われたら答えに詰まる。

あの誓いに出てくる”私たち“とは誰のことなのか。堺の先生や給食

関係者だけではなかったはず。地域・都道府県・校種・立場に関係なく、”子どもに関わる人たち“すべてを含めた誓いだったと思いたい。

当時、四十五歳以上だった先生方の多くは既に学校を離れ、十歳に満たない子どもだった人たちが今は教壇に立つ年齢になっている。

大きなことは考えられないが、”今後、子どもに関わる人たち“に対して、生命の重さ、家族の願い、自分たちの責務について伝え、感性を磨き、不幸を繰り返さないための具体的な態度・実践にまで高めることが、当時を知る私たちの役割である。

今回、私自身の意識を新たにする機会にしたい。

無題

松野 弥生

昨年、北陸の焼き肉チェーン店で病原性大腸菌による食中毒により犠牲者が出たという報道を目にしたときに堺市で起きた病原性大腸菌O1157による児童集団食中毒の事件が甦ってきました。

当時小学校三年生だった長男は下痢や嘔吐を訴える事は有りませんが、病院の待合室で親に抱きかかえられ苦しそうに横たわる多くの子どもたちの姿が映し出され事の大きさを知りました。

九五〇〇名もの児童が感染し三名もの児童が亡くなりました。今も後遺症に苦しんでおられる方もいると聞きますし、この食中毒によって給食が食べられなくなった子もたくさんおられたようです。

早朝に搬入された食材を常温のまま長時間放置されていたという問題も明らかにされました。

子どもたちにとって楽しみである学校給食でこの様な惨事が二度とあってはならないと思います。食品の管理や調理も一つ間違えると死に至る事が有るという事を心に留めて十分な配慮が必要だと思えます。

十五年が経過しても、〇―157や食中毒といった言葉を耳にするだけで当時のつらい記憶がよみがえり苦しんでおられる方や外食先では調理場の様子が気になって未だにすしや火の通っていない肉を口にする事ができない方がおられると聞きます。

今もおお検診を受けまだ補償交渉も続いているなどこの事件はまだまだ解決していません。

亡くなられた方、心身ともに傷を負っておられる方々を憶えて同じ過ちを繰り返さぬようにこの事件を風化させてはならないと思えます。

〇―157集団下痢症をふりかえって

T・I

あの七月の夏休み前の悪夢のような日から早いもので十五年の歳月が流れようとしています。

私の住んでいる堺区はお陰さまで被害者は出なかったのですが、生ものを口にするのが怖くて、さしみや生野菜が食べられなくなりました。「レタスまで湯を通して！」とびっくりしましたがこれが又しゃきつとして美味しく新しい発見でもありました。

大昔に栄養士の資格を取った私には初めて耳にする食中毒菌でした。その菌が死者を出すほどの怖い菌であるという事もその時初めて知りました。その〇―157の原因食品も特定されぬまま、カイワレ業者や寿司屋などの外食産業が多数倒産し、うやむやのままになってしまったような気がします。ただ頭の中に残ったのは菅厚生大臣(当時)のカイワレむしゃむしゃの映像だけです。

その年の夏、私は四国に旅行をしました。「堺から」と宿泊が断られる」という事で愛媛に住んでいる知人を介して宿泊予約を入れてもらい、「どちらからですか」の問には「大阪です」と決して堺という名前は出しませんでした。「堺です」と言わなくてもすぐに〇―157の話題を振られるのには参りましたが…。

それから月日が流れ、市長も代わりました。生きていけば成人になって社会のお役に立っていたであろう三名の亡くなられた方々、今だ回復されずに病院通いを続けておられる方々。その方達にとっては、きっと時間はその時に止まったままなのでしよう。

私たちにできることは、同じ過ちを繰り返さないという事しか無いと思います。

「作ったものをなるべく時間を置かずに食べることに」

「手指に傷があるときはゴム手袋をして直接食品に触れない事」など

ちよつと気をつければ私たちでできる事もたくさんあります。

「これ位の事は大丈夫」と思わずに常に気を張り続けたいものです。

未だ事件は、解決されず硬直状態とか、親の目から離れたところで又教育現場で起きたという事が尚一層問題を難しくしているのかと思います。一日も早く遺族の方が望まれる方向で合意がはかられ、残された方々のところが安らげられますようにと祈っております。

〇―157に思う

Y・Y

「〇―157によせて」の文集を出すと聞いた時、「何を今更 寝た子を起こすようなことを」と正直思った。もう十五年も前のことである。

当時、堺市内で学校給食による集団感染が発生、私の住む近隣の小学校でも感染し、一人の児童が亡くなるというショックな出来事になった。確かハ〇〇〇人近い人が感染し、三人の児童が亡くなったと思う。マスコミにも再三取り上げられ、堺市の住民というだけで旅館を一方的にキャンセルされたと、友人が憤慨していたの思い出す。

当時の小学生はみんな成人し、大学生として、社会人として青春の真っ只中。〇―157のことは思い出したくもないだろう。しかし、忘れたくても忘れられない人たちが居ることを私たちは忘れてはなら

ない。思春期も迎えられず、幼くして犠牲となった子どもたちとその親族の方たち。一番安心である筈の食育の現場で起こったこの悲惨な出来事は一体どこに怒りをぶつければ良いのか、やりきれない思いは、子を持つ親であれば誰でも理解できる。ここにきて、ようやくこの文集の意義が分かった気がする。

感染の原因として、「カイワレ大根」が疑われ、結果全国の食卓からカイワレ大根が消えた。それから十五年、我が家の食卓にはついに一度も上がっていない。もし「カイワレ大根」が汚染源でなかったとしたら、この風評被害もまた大きな問題であろう。

今、学校給食の業界では、堺市で許可が下りている業者は他市でも絶大な信用が得られると聞いた。堺市から二度と食中毒を起こさないという市の厳しい姿勢が窺われる。私たち市民も季節に応じて、熱処理をするなり、一人ひとり心して対処したいと思う。

職

武田有里

頭が混乱している。

当時、娘は二歳。たまたま〇―157に感染した児童のいない「湊小学校」（現在、湊西小学校と合併し、新湊小学校）の校区に住んでいる。だから…と言う訳でもないが、個人的に、又、育児に特別何か配慮した記憶はない。ただ常識の範囲での手洗いやうがい、所有者のわ

からない商品は口にしない等の注意しかなかったように思う。私的には、娘との関連より、むしろ「職」との関連の方が強いと思う。何故なら、私は高校生の時から、焼肉屋でバイトしていたからだ。

「私達はお客様の命を預かっている仕事をしている」と教えられた事がある。当時、高校生だった私にはとても大袈裟に聞こえたのですが、年月が経ち就職してからもアルバイトを続けてきた私にも、言葉の意味が理解できる日があった。何かの役に立つかもと調理師の免許も取得した。勉強する過程で、様々な菌の勉強もしたし、長い間飲食の仕事に携わるうちに色んな事を学んだ。どの菌が流水に弱く、どの菌が加熱に弱いのか。髪を触ると何菌が付着し、怪我をし血液の中には何の菌が存在するのか…。店では、手洗いはもちろん、アルコール消毒も欠かさず実施。お客様のテーブルの拭きあげもアルコール噴霧。蛇口、カラン、リフトや冷蔵庫の持ち手も最低一時間に一度のアルコール消毒。と共にダスターの消毒。生肉を取る箸と焼けた肉を取る箸を分けるようお客様に告知するPOP。吐瀉物の処理方法の徹底…。

病原性大腸菌O157や、ノロウイルス等の発生、発症を聞いたび、残念に思う。毎年何らかの形で話題となるにも関わらず、事前を防ぐ事のできる事なのに、又、繰り返すニュースになる。専門の知識がなくても、気を付けていれば、きっと防げる事だっただけなのに…。十五年前に起きた集団食中毒をきっかけに、色んな対処法も公開されていたはずなのに。他人事ではなく、いつでも、一般家庭でも起こりうる話なのだから…。

人にとって、私達にとって必要不可欠な「食」が「危険」や「死」に繋がらないよう。

二度と同じ事が繰り返されないよう、私達自身も勉強し、忘れる事なく「安心・安全な食」を守れる様努力していきたいと思う。

O-157

井上 俊子

真夏の日の出来事、堺で起った集団食中毒。あれはたしか日曜日に連絡が入り、えらい事が起きた。平成八年七月十三日の暑い夏の始まりを思い出す。その時、私は保育所で仕事をしていた。子どもの健康状態、家族に小学生はいないか、一人ひとり細かく調査。一番思い出すのは、手洗い、手洗い、手洗い、オスバン液、山づみ、門から入口までチェック、消毒、ノブ、廊下、便所は日に何度も消毒、はたまた、考えられないくらいピリピリ。あっちこっち 園庭のスベリ台、ブランコ、鉄棒、消毒しまくる。保護者には説明会。家での生活の配慮など。子どもへの健康観察、体温調べ、便の採取。親には毎日、丁寧なかわりを一人ひとりにした事を思い出す。家庭訪問もした。情報をもとに、不安がらせないよう、伝え方を工夫した。子どもの健康状態、毎日把握。職員の情報の共有や連携。会議もよくした。子どもへの給食、幼い子が口に入れる、安全な安心なもの、食材は吟味、どこから仕入れるか安全なところからか、時間がかかった、忘れもしない。果物は炊く、子どもはいやがって食べない、どうしたものかと頭を悩ました。少し時が経って落ちついた頃、子どもたちの生活は、これでよ

いのかとみんな考えていることを思い出す。それは情緒面、心理面といったナイーブなところを後回しにし、安全、安心、衛生面に気を取られていた。等々。今振り返って、思うに何か事件、事故が起こると、犠牲者が後まわしにされ、対応が遅れる。事の重大さが想定せず、何か忘れる。もしや、まさか、は、どうだったのか。又、二次感染者への実態把握への取り組みは適切であったのだろうか。大きな事故等起こると弱者が被害者になり、時間が経過し、世の中から忘れさられる。無理やり、こんなので良いとは少しも思っていない。一人ひとり、いかに意識持って生きる事。ひとごとと思わない、忘れない、子どもを犠牲にはしない大人でいたい。

追悼のことばは、

亡くした親ごさんには無念さは、いかばかりかさつする。命を重く受けとめ、防げることは万全を期して、想定出来ることは常に考え、現実化する体制を整えてもらう(行政にー)。

0-157の怖さあらためて心に

(匿名)

当時の私もまだ仕事をして頑張って毎日を送ってりました。残念ながら私達夫婦には子どもはいないので、申し訳ないがはじめの方には、関心は薄く毎日を送っていましたが、働いていた場所がデパートだったので、初めはひとごとでした。が、たくさんのお客が出てきたら、

店員の話も関心深く、みんなお弁当には気をつかいながら毎日を送りましたが、日が経つにつれ自宅の事の話にもふれたら自分は堺からと言えなくなって来たことも心の重荷にもなりましたし、主人は胃腸の弱い人です。ただ火を通す事しか私には出来ないのかといらだっておりました。自分は胃も元氣だからよいけど主人がと思うと、子どもはなくても思いは同じでしたね。それとかわいい子どもを見送る、なんと気の毒な事でしょう。私達には悲しい事があります。生後7ヶ月の長男を四、五日の間で見送りましたので子どもさんを見送る親の気持ちはずこしても思える人間だとおもいながら、0-157の菌のこわい事にどれだけ二人で話し合いました事でしょう。さいわい私は、食べないけないタンパク質系はとも食べられない自分なので、この十年以上焼肉ユッケ等食べておりません。やっとレバーの内に菌の話を書く様になり、ほっとしております。食べない私には関係のない事ではありません。これから成長なさるたくさんのお客の子どもの為にも安心して食生活を送られる事を願っている一市民です。

今日あらためて当時を思い出した事。でも手洗いは自分自身気をつけている次第です。

当時のカイワレを作っておられた方々の生活もおびやかされ、本当にお気の毒としか言えません。ひとごとではなく、自分もその立場にたち、もの事をすすめて行きたいです。

亡くなられた親ごさんの気持ちは現在もいかばかりかと思うとお気の毒としかいいようがありません。早く堺市民で良かったねと話が出る街になっていく事を願います。又、0-157の怖さあらためて心に留めます。

追悼の言葉

堺市立小学校校長

廻りくる七月。毎年、この季節になると、必ずあの夏が思い出されます。

平成八年七月。学校給食を起因とする腸管出血性大腸菌O—157による感染症が発生し、多くの子どもたちを苦しめ、三人の尊い命を失いました。

ここにあらためて、亡くなられた三名の子どもたちに、哀悼の意を表させていただくとともに、長年にわたり後遺症に苦しまれておられる方々に、心よりお見舞いを申し上げます。

当時、私は泉北の小学校で、教頭として勤めておりました。その学校でも、十六名が入院し、一〇〇名を越える児童が発症しました。

病院という病院が、発症した子どもたちで埋め尽くされるという異常な事態の中で、「どこにも子どもを入院させるところがないじゃないか」と、我が子を案じる故の、父親の憤怒の叫びが、今も耳朶に残っています。二学期になっても、登校できない子どもさんもいました。「岡山でも発生していたのに、学校関係者がもう少し危機意識を持っていてくれたら……」との悲痛な保護者の言葉が、強く深く心に刻まれました。

子どもたちの大切な命を預かる私たちは、誰よりも敏感にあらゆる危険を察知すべきであることを、未然に防ぐ手立てを的確に講じるべきであることを、そして、全てに迅速に対応すべきであることを、亡

くなられた三名の子どもたちと罹患した多くの子どもたちが、身を持って教えてくれました。

堺市立全小学校の校長室に、常に掲げている「誓いのことば」。「痛恨の思いを胸に わたしたちは誓います 二度とこのような不幸を繰り返さない」との誓いを瞬時も忘れることなく、子どもたちの命を守り、育むことを今再び決意し、追悼の言葉とさせていただきます。

堺市O—157学童集団下痢症

追悼のメッセージ

平成八年七月、堺市において信じられない大事件が発生した。連日テレビのニュースや新聞の一面で堺市がクローズアップされ、週刊誌でも特集記事が掲載された。かつて堺市がこれほどマスコミに取り上げられたことはあっただろうか。それほど大事件であり、とりわけ子をもつ親には大変ショックな事件であった。

給食を食べた多くの児童が食中毒をおこす。ましてや三人の尊い命が失われるなど、誰が想像したであろうか。誰もが想像し得ない事件が起こってしまった。いや、堺市が起こってしまった。

私は堺市で生まれ、育ったが、結婚を機に市外に引っ越していた。私には二人の娘がいる。平成八年当時、小学校六年生と四年生だった。亡くなられた子どもさんと同じ年頃である。だから、私にはこの事件は他人事とは思えなかった。私にとって二人の娘は宝である。それは

娘が成人し、巣立った今も変わらない。私には大切な娘がこの世からいなくなるなど全く想像できない。当時、自分の娘が学校へ行き、大好きな給食を食べて死んでしまうことを想像しようとしたがとてもできなかったことを覚えている。親にとって子どもが死ぬことなど全く想像できないことなのだ。

亡くなった三人の子どもさんたちのご家族もおそらくそうであったろう。受け入れ難いことが起こってしまった。「なぜ」という言葉しか思い浮かばなかったのではないだろうか。抑えがたい怒りと悲しみに苛まれたことだろう。それ以上は私の想像力を越えてしまっている。ご家族の心中を思い量ることなど私にはできない。私にできることは、私にとって二人の娘が宝であるように、亡くなられた子どもさんのご家族にとっても、かけがえのない宝であったらう三人の子どもさんのご冥福を心からお祈りするばかりである。

元 堺市民より

追 悼

堺市教育委員会事務局員

堺市学童集団下痢症が起こった当時、私は堺市立三宝小学校に通う六年生でした。私が通う三宝小学校では幸いにも〇―57の発症者はなく、テレビや新聞で集団下痢症の報道が多くされていたが、その時の私はどんな事が起こっていたのかをよく理解できていなかった。

後日の報道で堺市の三名の児童が亡くなったということを知り、小学校での給食で当時の私より年下の子が亡くなったのが驚きとともに、もしかしたら自分も同じ立場になっていたかもしれないと少し怖くなった記憶がありました。

集団下痢症が発表されてから学校はすぐに、臨時閉鎖された記憶があります。そして、そのまま臨時閉鎖が明けるとなく夏休みに入りました。担任の先生が自宅まで通知簿や夏休みの宿題を持って来てくれたことや、夏休み中に週二回程家庭訪問もあった記憶があります。

夏休みに入った後も、毎年行われていた学校のプール開放もされず、市民プールも使用禁止となり、なるべく外出を控えるようにという学校からの手紙がありました。

夏休みが明け、二学期に入ると、楽しみにしていた堺市の小学六年生が集まる連合運動会も中止になりました。さらに、今まであった学校給食も中止になりました。初めの一週間くらいは学校でお弁当が食べられると嬉しく思った記憶があります。しかし、早く給食を食べたいと思いましたが、給食が再開されるまでかなりの時間がかかったと記憶しております。

堺市学童集団下痢症から十五年の時が経ち、私は堺市に採用され、堺市教育委員会事務局へ配属されました。配属当時は堺市学童集団下痢症についての記憶が薄れておりましたが、すぐに当時の記憶が思い出されました。そして、二度とこのような痛ましい事が起こらないように当時の記憶を胸に刻み、公務に励むことを誓い、追悼の言葉と変えさせていただきます。

学校給食で悲しい事故が

再び起きないことを願って

上 甲 晴 美

あの日も、いつもと同じように「行ってきます」と元気に学校へ向かう普通の朝だったと思います。「ただいま」と帰ってくるのが当たり前で、給食を食べて体調を崩したり、ましてや亡くなったりするとは、誰も想像しなかった出来事です。

多くの子どもたちが苦しんだことに、十五年経っていますがお見舞い申し上げるとともに、亡くなられた尊い命に心から哀悼の意を捧げます。

私の夫は当時、堺区の小学校に勤務していました。夫の勤務する学校の児童に被害は少なかったのですが、「なんでこんなことが起こったんや」、「かわいそうに」、「悔しい」と落ち込む日々でした。そして、解決がないまま翌平成九年に定年退職を迎えました。

夫は退職して間もなく、血液のがんになり六年間闘病しました。治療や病気の進行により意識が朦朧とすることが何度もあり、その度夫からでてくる言葉は、「給食」でした。「子どもらは給食食べたか?」、「給食大丈夫か?」、「給食、給食…」とうわ言のように言っていました。

昭和四十六年頃、夫が勤務していた学校で堺市全国学校給食大会が開かれました。給食主任だった夫は前年の大分県で開かれた全国大会に出席し、堺市での大会成功のために努力しました。そのときの全国大会のテーマが「楽しい給食」だったと記憶しています。当時の時世、

食糧事情からのテーマだったと思いますが、学校給食は、子どもたちにとって「楽しい」ものと捉えられていました。

いつごろから給食教育のテーマに「安全」が入ったのか、あるいは入っていないのかわかりませんが、堺市〇―一五七学童集団下痢症の悲劇が、「学校給食は安全である」という大前提が揺らいだ結果となりました。

夫は、平成八年十月に開かれた堺市連合音楽会の開会の挨拶で、次のようなメッセージを送りました。

『〇―一五七による集団食中毒でみなさんは長い不安な夏休みを過ぎざるを得ないこの夏でした。今日出演するお友だちの中にも、下痢やおなかいだで苦しんだ人がいると思います。それでもみなさんは、がんばって練習を重ね、今日市民会館のこの立派なステージで演奏できることになりました。嬉しいことです。この連合音楽会を開くことについて、先生方は色々考えてくださり、相談していただきました。

その結果、音楽は辛いときにも、苦しいときにも人の心に勇気や元気を与えてくれるものであり、皆さんに元気を取り戻してもらうためにも是非開催しようということになりました。みなさんは多くの友だちと心をあわせ楽器を演奏したり、声をあわせることで、きっと心を和ませ元気を取り戻したことと思います。それと〇―一五七により亡くなられた三人のお友だちのことに思いを寄せ、心を込めて演奏してください。』(本人が書いた原稿より)

この出来事から十五年経った今も未だ全面的な解決には至っていないと聞きます。なぜなのだろうと悲しく思います。天国で夫は三人の子どもたちとなんと話しているか、思いを馳せます。

「命を大切に」を教えているはずの教育の場で命が奪われるほど悲しいことはありません。追悼とともに、一刻も早い解決と二度と同じことを起こさない誓いを十五年の機に、今、界に生きる私たちができればと思います。

子どもたちの未来のためにも

杉 本 理早子

真夜中だったと思う。ちょうど七月九日に産まれた娘に授乳をしていたので忘れもしないが、救急車のサイレンが聞こえたと思うとだんだん音が大きくなり、真下を通っているのがわかった。窓からのぞいてみると救急車が一台ではなく、二台目、三台目と次々と入ってくるではないか。何か大きな事件があったのではと胸騒ぎがした。看護師の方に尋ねてみようかとも思ったが、私にとって初めての出産で母乳で育てる事に頭がいっぱいだったので、授乳やおむつ替えをしているうちにすっかり忘れてしまっていた。

一週間後に退院をし、喜びの中、実家へ戻ってみると、テレビのニュースが〇―57のことが取り上げられていた。「〇―57って？」そのままニュースを見ていると、私が入院していた大阪府立母子医療センターに救急車が入っていく映像だった。その時ハッとしました。「真夜中のあの救急車は〇―57に感染して緊急搬送してきていたんだ。」私の中でとても複雑な感情が生まれた。あの時私は初めて自分の子

どもの命をささずかり、嬉しさと喜びの真っ只中にいた。その傍らで〇―57に感染し、その時は原因もわからないまま食中毒で、しかし重症で生死をさまよう危険な状態であったなんて。それから連日患者が千人単位で増え続け、テレビの前から離れることができなかった。それから数日後に一人の女児が命を引き取ったとニュースで発表された。それもあの日に私が窓から見ていたであろう救急車の中で苦しんでいた女の子だとは信じられなかった。私はその時自分の娘をこれから先まだまだ多くの可能性を秘めた未来のある女の子の分までしっかり育てていこうと大げさに聞こえるかもしれないが、心に誓った。

今その娘も中学三年生の受験生である。反抗期もあり、なかなか一筋縄ではいかないが人の気持ちが変わる優しい娘に成長したと思う。私たち大人にできることは不安や不信に思ったことはほとんど声を上げて、行政や国に取り上げてもらうように働きかけるべきだと思う。誰かがしてくれるからいいやという思いでは未来への道へ子どもたちを歩かせていくことはできないだろう。私も改めてこの〇―57の食中毒事件をふまえて、二度と再発されることがないように対策を講じてもらいたいということと同時に自分自身ができる手洗いや加熱調理を徹底したいと思う。

無 題

長 田 輝 子

私は堺市に来て十年です。

当時、テレビのニュースで知りました。毎日報道されているのを他人事のように聞いていましたが、徐々に大変なことになっていることを痛感しました。手洗い、うがい、生物の食べ方とかテレビはこの件、一色になり、潔癖症の私は脅えました。当時の堺市の方々、特に小学生のお子様がいらっしゃる方のご苦労は、大変だったことでしょう。九千五百人という桁はずれの人数に、今もって驚きです。私は日々野菜をあれ以来、熱湯で洗うようになりました。思えば当時の生物を扱う仕事をされている方々の苦しさはいかばかりでしたでしょうか。偏見とも戦わなければいけなかったでしょう。私のように他人事と思っていたことが偏見なのでしよう。誠に申し訳なく思います。

この件が生かされず、後をたたない現状が悲しいです。私も家族の食事を作っていますが、食べ物や身体の中に入るものだという事をいつも、念頭において作ります。元来、神経質の私は、今こうして十五年も前に起きたことを聞き、日々の食事に真剣に取りくむことになるでしょう。

堺市に来てから、堺は大変、素晴らしい町だと喜んでいきます。ここ三年勤めていた仕事を退職し、やっと、堺市民になったと感じています。堺の方々十五年前は、本当にご苦労をされたのだと、痛切に思います。

東日本のことも大変ですが、私達はこの様なことを忘れてはいけません。と思います。

自分の健康は自分で守らなくては

中 澤 桂 子

殆ど忘れていたが十五年前のある日「堺市内で悪質な食中毒が発生した。」というニュースが流れ「えっ！それってこの堺のこと？私たちがすぐそばに？」と最初は実感の伴わない驚きの気持ちが強かった。しかしそのニュースは日を追う毎に深刻で重大な内容となり、患者数は増え続けた。しかもその原因や対策は一向にはつきりせず私たちは不安でたまらなかった。暑い長い夏の間、何より特に子どもたちはもわからず行動を制限され、学校に行けず、プールは閉鎖され辛い毎日を過ごしていた。予防の方法がわからないので私たち主婦は「とにかく食物にはしっかり火を通す。」ということ位しかできることはなかった。後で厚生省から「原因はカイワレ大根だ。」と発表があったが私たちはそれには懐疑的で、裏に何か事情があつてカイワレ菜が犠牲になったという感じはいなめない。

堺市内で三人の人が亡くなられ、患者数は九千五百人を越えるということで、何故それほどまでに被害が広がったかということについては、調査もすすみその結果が報告されている。私たちはこの貴い犠牲を教訓に、賢い市民になって行けるよう成長して行けるだろうか。

個人的レベルで私たちが取り組めることは平凡だが①各人が自分の健康についての意識を高め、毎日の生活、食習慣などを大切にする。②手洗い、うがいを習慣にする。など基本に立ち返ることこそが第一のことである。これは家族や仲間などで声かけをすることも効果があり、行政による啓蒙活動も必要であることは当然だが、それらが過度になり、人々の不安をあおるようなことにならないように注意したい、ということはマスコミ報道などを見て特に思うこの頃である。

無題

西尾次子

十五年前、ラジオ等でO―157の事を知りびっくりした事を覚えています。恐ろしい菌があるのを知り、昔こんな事がなかった気がしました。便利になり、食べ物も豊富になったのに対し恐い菌も出て来たのかなあーと思いました。昔私達の時代は戦争の怖さばかりで食べ物も家で作った物ばかり外食する事はありませんでした。それが良かったのかなあーと思います。床に落した物でも拾って食べたり、道に落としたアメでも拾って食べました。それが感染しにくい体を作っていたのかなあーと思います。今の子ども達は大事にして貰いすぎて体力もない上、この世の中にどんどん強い菌が増え続けるのに対し抵抗力がないと思います。

生物が、こんなに怖い事も知りませんでした。病原性大腸菌とかべ

口毒素とか昔は聞いた事のない言葉でした。

被害者になられた人達も多分こんなに恐ろしい菌が食べ物に付いて口の中に入るとは思ってもいなかったと思います。

重症になられた方。命を落とされた方。発症された方。本当にお気の毒で言葉が出ません。まさか、食べ物でこんな事になるとは誰れも思っていなかったと思います。

何も悪い事はしていないのに差別を受けたり今だに苦しんでおられる人々がいるのは残念です。遺族の皆さん、被害者の皆さん、本当に辛いです。これが、これからも頑張ってくださいませ、お願いします。

命を失った人は、発言も出来ないで、その分、長生きして、こういう事は二度と起きない様、お互いに、願っていきましょね。

私達も人事には思えません。いつ自分の身の上に降りかかってくるか分かりません。

O―157等二度と感染しない様防ぐには火の通っていない物を、口にしない事です。

こんなに犠牲者を出しているのに、最近又O―157も出ています。犠牲者の方にも願いが届く様に…

以後、絶対、犠牲者を出さない様に努めるのが私達の、つとめだと思います。

被害者の皆様と共に頑張りたいと思います。

無題

藤林芳乃

〇―57のニュースが、テレビより、流れた時は、多分、子どもと一緒に見ていた様に思います。子ども達の学校は、被害は、なかった様に記憶しています。しかしその時子ども達と話しあった事は〇―57の五年前に息子が五年生のりん間学校で食中毒に遭っていたので、その時の事を思い出して、今回の様にひどくなく、軽くて終わった事は幸いだったねと、言っていたものです。〇―57は日がたつにつれて、ずい分ひどい状態になっていきました。

何が原因なのか、二度、三度と変り、ニュースも同じ様な事をくりかえし、報じていた。被害者の方々にすれば、もっと早くに被害のはあくに努め、堺市は、大阪府、保健所、国との連携を取ってれば、二次、三次の被害は、もっと早くに、収まっていたのではないかと、カイワレを試食した、大臣もいましたけれど、安全とわかっていながら、食べて、笑顔で対応したのも、見ていて、腹たたいものがありました。

何か事が起これば対策本部とやらが置かれる様ですが、その中で何が話し合われているのか、新聞、テレビでさえ出てない事も多い様です。かくす事なく発表するのがそういう方々のつとめだと思っております。コメントイターの方も専門外の事でも見て来た様な、自分が出合ったかの様な言い方をするのもいかなものでしょう。被害者宅には、報道関係者がつめかけている光景は、被害者に対して二重の悲しみを

与えている事を忘れないで下さい。

被害者家族の方も同じ年頃の方を見れば、悲しみは、いっそうつり忘れる事のない一日一日を送られている事と思います。

今の私に出来る事と言えば毎年の追悼式に出席させてもらい、一輪の花をたむけさせて頂く事位しか悲しみをわかちあえられないのではないかと思っています。

不可効力

大塚幾子

堺市から明石市に引越して数年、専業主婦から少しだけ主人の仕事のお手伝いをするように生活のリズムが変わっていた。突然テレビで堺市がクローズアップされました。良いニュースであれば嬉しいのですが、十五年前の七月十一日〇―57という病原性大腸菌による被害が全国に広がりました。どこで誰が感染してもおかしくない状態、手を洗っても完全に防ぐことは難しいでしょう。その後「カイワレ大根」が原因とか云われ業者の方々の胸の内はいかばかりだったことでしょう。他人事とは思えませんでした。その後現在も原因は究明されていませんね！又、牛肉の問題がおきてそのおそまつな扱に驚きも隠し切れません。日本は食について安全管理は充分とっていました。社長自らがどんどんエスカレートしてお金だけと考えていたとテレビで知った時背筋が寒くなりました。トリミングの手間をばいいたりと幾

重にもくり返された悪行、他の業者も行っていたかも知れませんが。

さて今思えば発生時にとられた病院関係その他の伝達のスピードも必要に応じていたのでしょうか？二次感染の発表が早ければと素人でも判るのではないかと腹をたてていました。六十才を過ぎた今まだフランスの良い食事をしていない自分を反省したり、身近に患者が出なかったため重視しなかったり情ない現状です。どのような出来事も放送関係の有り方に疑問を持ちながら最近では自分なりにネットで調べたりしています。話は飛んで東北大震災を知ったのはハワイ島のホテルのお部屋でした。テレビの画面は映画の一コマのように見えます。すぐかかった娘との電話も通じなくなり、持参のパソコンからメールでやりとりしました。同じハワイ島内に宿泊していた埼玉の団体さんはお気のどくにビーチそばのホテルが日本からのつなみ被害で深夜ホテル移動、観光も道路が通れず空港でぼやかれていました。私達夫婦はフリーなのでレンタカーで通行可能なところを選んで遊びました。やはり自分の身は自分で守る術も必要と実感致しました。自分に出来ることは「うがいと手洗い」と簡単なことですが〇―157その他感染症に対してはこれが大切と思うので自分のみならず家族、親族、友人、知人、皆様に口を大にして伝えてゆきたいですね。〇―157の被害をうけられた皆様のためにも貴重な命・心・目・耳・口を頂いている私達は感謝しながら一日一刻を大切に生きてゆきましょう。どうぞ皆様の魂がすこやかに眠っていらっしやいますように心からお祈り申し上げます！

〇―157

黒岩 智子

平成八年。私は、兵庫県に住んでいた。

私の実家は堺にあり、その堺で「〇―157」という食中毒のニュースが走った。初めて聞く「〇―157」という言葉に、テレビから離れることが出来なかった。

堺に住む、小学生の娘を持つ姉に電話を入れると、給食の区分が堺の中でも三つのグループに分かれているので、こちらは異常なかったとの事。

街中がパニック。テレビの中でもパニック。貝割れ業者がパニック。友達と入ったファミレスで、少し生焼けのハンバーグが出て、店長がパニック。ここは兵庫県なのに。

生野菜のきゅうりをふにやふにやになるまでゆでて、サラダもパニック。

当時、私にも小学生の娘がおり、犠牲になられた子どもさんと思うと胸がしめつけられる。

そんな時、新聞で、堺在住のある方の投稿文を読んだ。それは、今までは、公衆トイレのトイレットペーパーの使い初めを、三角に折つてあるのを見て、その奥ゆかしさに、日本人の心の美しさを覚えていたが、もうそんな事はやめてほしい。二度と次のトイレットペーパーを触らないで。と訴えられていた。

今回のこの痛ましく悲しい「食中毒」が、人の心をここまで変えてし

まう恐しさに、私は、とてもショックで悲しかった。

当時の「はとぶえ」に載っていた「僕、あらいぐまになってしまう」の作文。もしもタイムスリップが出来たなら、その子のもとへ飛んで行き、力いっぱい抱きしめてあげたいと思った。これからの日本、子ども命、人の命を守り、どうぞ人の心の優しさをそのままに受けとれる世の中であってほしいと切に願う。

〇―157の発生から思ったこと

江崎 喜美江

今から十五年前、〇―157が堺市で発生した。私は、当時四十五歳で、高校生の長女と中学生の長男、二人の子どもを持つ母で、テレビのニュースを見て驚いていた。

私達家族は、隣町の高石市に住んでいたの、何となく他人事の様な所もあったが、ニュースは、ただ事ではなく、三人の子どもの死亡も伝えていた。私は、子ども達の弁当作りの毎日でしたが、自然と、手あらい等、食事の衛生管理に気をつかう様になっていた。

〇―157菌は井戸水が原因だとか、色んな報道の中、不安、病気にかけた子ども達への差別やらで、堺市に住む人達を気の毒に思っていた。亡くなった子どもさんの両親の悲しみ、幼稚園児達の悲しみを思い出します。

〇―157にかからない様にする為に手あらい、食品加熱処理等、

衛生管理に、気を使う努力や、感染しにくい体づくりを、しようと、思っています。

まず、繊維質の多い食物、乳酸品、ビフィズス菌、オリゴ糖を摂取したり、疲労や睡眠不足の解消や、食物のバランスを、考えて栄養を取りたいと思います。

最近のニュースに、焼肉店から〇―157菌が出て、食中毒で死亡した事や、牛肉のレバーから、〇―157菌がみつかったり、食中毒に、ならない様に、危険な食品はさけ、食べない様にしようと思います。

また、被害者の方々の、心の痛みをせつなく感じます。

堺市に引っこして、十年になりますが、堺市追悼式に、参加できる機会が出来、〇―157に対して、十五年続く痛みを、追悼いたします。

無題

岡田 津代子

〇―157の「追悼の言葉」の機会に普段ほとんど文章を書く事のない私は勉強させてもらおうと参加しました。当時、長女の子ども(男子)二人は、三才と五才。娘の勤める保育園にいつも三人で通っていたようです。私も私立大学でメンテナンスの仕事をしていましたので、職場でも大きわぎになりとても大変だった事を思い出しました。

職場の孫さんも被害者になられ、子どもはもちろん親も家族も家中大
変で「代わってあげられないのがつらい」となげいておられました。病院
も長時間かかるのでみんな疲れきっている、家中ひっくりかえってい
るとの事でした。治療の後は「様子をみてあげて下さい」と生命にかか
わることなのに、となげいておられました。自分に被害はなくても、
まわりから聞こえてくる重大事に、何が原因で何の過ちで、こんなに
多くの人々を苦しめるのか誰に責任があるのかと腹立しく思ったもの
でした。あれから十五年たった今、二度とくり返さない為にどの様な
事をしたのか、しているのか ほとんど耳に目にした事はありません。
追悼の集会に参加させて頂く事もありませんが、忘れないでせめて振
り返って気持ちを新たに気を引きしめたいものです。

つい最近、シルバー人材センターから勤めています私立幼稚園で、
ノロウイルスが発生しました。休園、消毒、汚物処理の方法、手洗場
のそうじ、消毒とその回数等、大変な時をすごし、今少し落ち着いて
きましたが、気をゆるめないで、清けつにしていくべきだと、心にち
かい、がんばっています。

短い人生を終えられた子どもさんには、どれだけの言葉をかけても、
心安まることはないでしょうが、二度と同じ事が起きない様にするの
が、みんなのつとめだと思います。

袖を振り合うこともなかったあなたへ

下江 泉

「OSAKAのSAKAIは〇ー57で大変だね」「えっ知ってる
の！」十五年の八月、チチカカ湖を渡る小舟で、スペイン語しかでき
ないペルー人のガイドの言葉でした。「それは私の町。今大変なんよ」
と言うと「アメリカやら他の国でもたくさん死者が出ているよ、で
も収まるから」と慰められ、地域的には渦中であっても、身近に子
どもがいなくて新聞などの関連ニュースをいい加減に読み流していた
ことがわかりました。

しばらくしてあなたのお姉さんを知りました。すらりとした細面の
どこか寂しげな方でした。いろんなことがきちんとできるやさしい方
でしたが、「あなた」という存在を知ってしまった私は、顔を合わす度
に笑顔を求めていました。「あなた」について語ることはないだけに、
喪った悲しみは深いでしょうが、私達といるときだけでも心安らかに
いてほしいと願わずにいられますでした。

〇ー57という記号だけの冷たい言葉が、黒い硬質の固まりのよ
うに強く解明を拒んでいるように思いましたが、昨日のニュースで初
めて、牛のレバーの中に見つかったとありました。十五年間、その魔
の手につかまらないようにとだけの対策が、これで大きく進んでほ
しいものです。

またあの全学的な広がりは何故だったのか、今はまた合併してはる
み小となった晴美台小に被害が大きく、晴美台東小は同じ給食ルー

にもかかわらずほとんど被害がなかったのはなぜかなどの解明や、市としての対策は大丈夫なのでしょうか。

「あの夏さえなかったら」ときちんとした解明や治療法を求めてこられた方々、きつと「フツウ」に「健康」に青春を謳歌されていたあなた方のためにも、まだまだたくさん課題を私達は解決していかねばなりません。

無 題

川 上 智 子

十五年前、一九九六年、私は、その年をよく覚えている。六月十七日に娘を出産した年だったから。テレビのニュースで報じられた時、「また、食中毒？学校給食っていいかげんに調理されてるね。」と母と電話で話した事もよく覚えている。その後、どんどん被害が拡大し、生まれて一ヶ月余りの娘が罹患する事がない様にと、あまり出かけず、手洗いうがい、食事も加熱調理等々、大雑把な私の性格にしては、ずいぶんと気を遣っていた様に思う。おまけに、主人は、病院勤務だったので、何だかとても心配したのを覚えている。

その後もニュースで報じられていたけれど、まさか亡くなってしまいう子どもがいるなんて、思わなかったし、亡くなった報道を聞いても信じられなかった。これ程医療が進歩しているのに…。食中毒は、簡単に治ると思っていたからだ。「まさか…。」「何故？」「原因は？」と

思ったままで、それ以上調べる事もなく、自分に実害がなかったので、記憶の底に沈んでいってしまった。

あの時、自分が何が出来たのか？何をすべきだったのか？今でもよくわからない。何故、小さな子どもが犠牲にならなければいけないかったのか？

いつも、大きな出来事がおこった時、誰が悪かったのか？と患者探しをしたり、情報を隠したり、とあら探しをする報道が多い様に思う。本当に良くないのは、あら探しをしたくなる私達の心が良くないと思う。

〇―57で犠牲になられた方々には、心からの哀悼を捧げると共に、二度と同じ事が起らない様に語り継いでいきたいと思う。

暑い夏だった

井 藤 正 子

町内会の回覧板で、「浅香山小学校区の給食は安全です」とのピラ。子どもも大きくなっていったので報道される以外は知りようもなく「うかこの辺は無事なんだ」と思ったものだ。

他市へ朝早くから夜まで勤めていたこともあって、近くで起こっていたとは感じられなかった。

ところが、門真市の小学校に勤めていたので、少しずつ身近になってきた。夏休みのプール開放が始まったと思ったら中止。その地区は、

学校でのプール開放を楽しみにしている地区だったので、門真の子どもたちも暑い夏を過ごすことになった。二学期になると、学校給食に生野菜、果物は出なくなった。肉を使った調理実習もできなくなった。栄養士、調理員さんの細部までの注意。給食の検査は、必ず早目にするようになど、児童がそばにあり、学校給食もある中では、他市のことと済ませることはできなかった。

職員同志でさえ、お茶を飲む時、「えーさん塚に住んでたん、大変」と、私のそばを離れていくしまつ。じょう談にしろ、真実を知らないことは、恐しいもの。真実を明らかにし、広く知らせることがいかに大切か思い知らされた。

ただ日にちが経つにつれ記憶が薄れていくもの。追悼式典に参列して十五年前のことを思い出したので、長く伝えていくことが大事だと思った。原因の究明もされていないとのこと、特定は難しいのだろうか。長い間子どもたちと学校給食を食べてきたので、おいしい給食が原因でこんな悲しい出来事が起こったというのはつらいことです。

どんなことにしろ、子どもがなくなった、被害にあったというニュースを見聞きするたび、悲しくつらい気持ちになります。

安心しておいしく食べ、強く明るく生きていく姿を見て下さい。

0-157によせて

浅川 往子

十五年前は、まだ塚の住民ではありませんでした。高槻に夫婦で住んでいました。子ども達が、学校の都合などで外に出た事をきっかけに、義父が前年に亡なり義母の一人ぐらしを近くで支えようと、塚へ転居を決めた頃でした。0-157と云う初めて聞く言葉に云いようのない実感のない不安を持っていました。と同時に、塚で起っている事は、遠くの出来事のようにでした。テレビから聞こえてくる事柄は他人事のようにも思っていました。今回改めて、十五年前の新聞記事を読みました。その時の緊迫した様子やくわしい話には、重大な事が、起こった時、どう行動できるか、考えてみました。きっと、目の前の事しか見えずにパニックに陥るであろうと、そして今でも原因が分かっていない事にとても不思議に思います。どこかに原因や発生がなくて、こういう事は起こらないと思います。

それに、学校給食からというのも残念に思いました。衛生管理は、うるさい程している物と考えられています。調理人の一人一人は、子ども達の健康を願って毎日調理されていたでしょうし、親たちも何を気をつけて毎日生活すればよいのか、不安な日々だったと思います。人は、こういう重大な事が近くで起こったら、どう冷静にどう判断してどう行動できるでしょうか。やはり、新聞やテレビ、学校に情報を求め、その中から選んでいくと思います。今回は、食に関する事でしたので、とにかく加熱。なんでも加熱。もちろん大事な事です。意識

を持って考えながら、そして多くの事を知るといふ事も大事だと思いましたが。他人事のように見ていた色々な事。〇―157の恐しさも資料を見て、もっと頭にたたき込まなければ、家族を守る事はできないと思えました。同じ感覚で行政も、自分の家族が被害に遭っているという気持ちで、真剣に立ち向えば、重症者も少なくなったのではないかと思います。九千五百人以上という大きな数字は、忘れずにいたいと思います。

今だに、心と身体に傷を受けた方、治った方も、忘れられない苦しみにも少しでも心をよせ、亡くなった方々へは、同じくやさしい思いをしない世の中になるよう祈ることしかできませんが、そうなるように少しでも力になれるよう努力していきたいと思えます。

〇―157に関して想うこと

宮 本 満智子

十五年前の〇―157の発症した当時を思い出すと、仕事をしていて堺市住民であったにも関わらず、それ程の関心ごとではなかった気がします。

息子も成人していたこともあったので…
テレビのニュース画面で流れる情報で、大変やなあ。ぐらいの思いしかなかった様に思われます。

ただ、当時、厚生大臣だった菅さんが、カイワレを、ニコニコ笑っ

て口に入れる姿だけは鮮明に憶えています。

すごい違和感をもって、カイワレでないのなら、何なのだ！という不信感を持ちました。

〇―157って、一体なに！どうして！なにから！

今十五年という歳月が過ぎて、現在女性大学で学ばせて頂く中で、毎年〇―157の追悼、祈りの集いがあり、初めてその被害の大きさ大変だったこと、今も原因不明のまま、つていうのが不思議です。

学校では絶対に起きてはならないことが起きそれは、今は安心、大丈夫というわけではないのですから…

家庭で、学校で、地域で、食に関わるすべての人が、気をつけること、と言っても、悲しいことに、自分自身に関係ないことは忘れ去ることが多い中で、あつてはならないこの様な出来事を、どう残すか。当事者だけの問題ではないのですから…。

語り継ぐことの大切さを、実感します。

被害にあわれて亡くなられた子どもさんは、当時七才だったとして、今は二十才を過ぎて青春真っただ中、やりたいこと、いっぱい、あつた筈、当人、親御さんは、どんなにか、無念なお気持であろうと思われまます。

同じ年頃の子どもの姿を見られては、生きていたら…と悲しく残念、無念の、お心だとお察し致します。

子どもさんを亡くされた親御さんのことは、自分も、同じ親として、思う時、つらいです。今もって解らない原因不明を、説明することを、切に願ひ、二度とあつてはならない、この様な事件を、起こさないことが、私達にできる、最大のことと思えます。

0-157 堺市学童集団下痢症事件を思う

桜木 すみ子

去る平成八年七月に報道があり、私はこの聞き慣れない、しかしありふれた大腸菌の仲間により六千人を超す小さな子どもたちが被害にあったことを知りました。

夏の暑い時期ということもあり食中毒は全国にちらほらと発生が報じられていましたがこの堺市の集団発生は被害者数が群を抜いており、その為か堺では何かが起こっている、小学生がバタバタと倒れているというようなニュースが盛んに流されておりました。当時は、今から思うとばかげた報道のせいで、旅行先で堺市から来たというだけで宿泊を断られると言うような一種のパニックが起きていました。私は、日本人って自分で考えることも無く流され易い人がなんと多いのだろうと齒がゆく、がっかりしていましたが、その性質にある種怖いものも感じてしまいました。

一方で、原因究明はなかなかはかどらず、相変わらず無責任な報道で右往左往させられておりました。その中で、私を驚かせたのは、給食の状態でした。なんとこの夏の暑い日に、冷蔵庫に保管されること無しに、何時間も屋外で食材が放置されていた事実です。食に携わる人が、何の疑問も持たずにこんなやり方で大切な子どもたちの給食を作っていたのです。

今まで何も起きなかったのが不思議なくらいです。本当にお役所と言うところは、何か起きなければ動かないのか。こんな簡単なことで

学校の給食を楽しんでいた子どもが亡くなるなんて、怠け者の大人に殺されたようなものではないかとさえ思いました。

でも、よく考えると、この種のごはお役所に限らず私たちにもよくあることだと気づきました。普段何も思わずに行動していることや考えていることが、違う立場の人から指摘されて、はっとすることがあります。なるほど、間違っていたのだと気づかされることがあります。

あれから確かに学校給食現場での衛生面の改善は行われたのでしよう。目に見えて被害は少なくなりましたが、同時にこの事件の痛みも減ってしまったかのようです。でも忘れてはなりません。堺市民は0-157の事件で大変大きな犠牲を払ってしまいました。その原因は何処にあるのでしょうか。はっきりとこれだと言えるものは分かりません。ただ、先にも申しましたように、私たちが日頃何も考え無しにしていく事が実は大きな危険と繋がっていることがあるのだ。その為に、自分や自分の大切な人・隣の人たちが危険な目に遭うかもしれないということ。だから自分で考える癖を身に付けて、自分も守る、他人も守る人にならなくてはいけません。そうしないとこんなに大きな犠牲を払っているのにあの時に教えてくれた小さな子どもたちに申し訳がありません。

教えてくれてありがとうございます。と書いておきたいです。

「食」の安全を守りたい

西 希実

「小学校の給食で、集団食中毒が発生し、大変な事だなア」とは思っていたが、食中毒は夏によく発生する事で大した事ではないと当初は思っていた。しかし、カナダの知人が「塚で大変な事ね、大丈夫？」と連絡してきて、井の中のカワズだったなアと改めて事の重大さに気づいた。

食品業界は売れない「風評被害」という言葉が良く耳にされた。今年も、原発事故関連で「風評被害」が多く発生し、危険なモノ、疑わしいもの、罪もないのに買いひかえられているもの、様々であるが、経済的な損失は想像を絶するものであったと思われる。

食に関しては安全、安心が主婦の重大な点で、〇―57以外にも、目を向けなければ、注意しなければならぬ事がたくさんである。製造年月日の偽り、残りものをラベル貼り替えて売ったり、売れのこり牛乳を再利用して作ったり、貴重な体験が生かされない残念な事件が次から次へと発生し、なげかわしい事、この上ない。

〇―57の事件後、プールが使えなくなった所が多く、楽しみにしていた子ども、泳ぎの修得の機会を奪われた子ども、活動の場所がなくなったのは大変残念でかわいそうな事であった。一方、プールの水換えをしなくても良くなり、水道代が浮いたと、学校関係者から聞き、皮肉な事もあったものである。

給食が中断され、困ったのは子ども達の親、働く母親であった。給

食は働く母親の強い味方で、私などは一時期、五人の弁当を作っていた事もあり、弁当作りは気苦労の多い仕事であった。弁当は普通の食事と違い、汁気の多いものは禁。特に傷みやすいもの、くさり易いものは厳禁で、どれ程、気を使うかわからない。私は早く給食を解禁してもらい、すごしやすい平安な生活を取り戻してもらいたいと願っていた。

高校の文化祭では縁日、と称して、おでん・焼きソバ・カレー・たこ焼き、等を調理し販売する催し物をよくするが、この年から数年は調理禁止、食品を取り扱う事禁止となってしまった。復活後も調理する者は検便を行って、それ以外は調理しないように指導が行われ、検便嫌で飲食バザーは避けられたと聞いている。

人は時が経つと良くも悪くも忘れていってしまう事が多い。忘れないうと頭の中はパニック状態になるから、うまく整理をつけて、要領良く忘却していききたい。しかし、忘れてはいけない貴重な体験、貴い教えが数々ある。悲しい被害を教訓に、我々は同じ過ちをくり返さない様に肝に銘じ、改めて実生活に取り組んでいく事を誓い、追悼のメッセージとさせていただきます。

中野 恵美

〇—57が発生した当時、私は「堺ケーブルTV」でアルバイトをしていました。

七月二十二日、仕事の帰りに上空には数台のヘリコプターが、けたたましく鳴り響き私は何かあったんだな？と思いました。

次の日、ニュースを取り上げる為に「女の子が亡くなったので、〇〇小学校へ行くよ！」

と、やはり言われ準備をしました。

学校では、全校集会が行われ校長先生から生徒への、残念な報告がありました。

そして、黙祷：涙ぐむ先生や生徒の姿がありました。

インタビューをする為、マイクを近づけると声をつまらせる人もいました。

「ご冥福を、お祈りします。」

としか、声をかける事が出来ませんでした。

当時、私は二十三才でしたが今、亡くなった女の子と同じ、五年生の娘がいます。

学校の給食を信じて、親は預けているのです。

もし、自分の子どもだったらと思うと何を信じて良いか？分かりません。

事件の後、お弁当を持たせる親が多かったそうです。

五年前に、お弁当を持たせる人の話を聞きましたが、給食が再開して十年ほど経過している中、心配な親御さんがいるのも事実です。

追悼の言葉

辛かったですよ…

あなたを大切に、今でも家族は想っています。愛しています。

この世の中にとって、あなたの死という存在が決してムダではなく、社会問題として大きなものだったのです。

どうか次に、生まれ変わった時には幸せが訪れますように…。

ご家族の方にも、同じ気持ちでいっぱいです。ご冥福を、お祈り致します。

被害を受けた方々へ

十五年もの月日が経ち、今現在も苦しんでおられる事と思います。肉体的にも、精神的にも苦痛でがんばっておられる事でしょう。

「世の中に言いたい事は、決して繰り返さないでほしい。沢山の方々が、犠牲になられた現実をどうか忘れないでほしい。」

と、願っています。

「被害を受けた皆様、どうぞおだいじになさって下さい。」

最後に、私の娘は熊野小学校へ通っています。

「学校の給食のおばちゃん。いつも、おいしいよ！ありがとう！」
と、信じて食べています。

どうか、子ども達の命を預っていると重く受け止めて、安全に注意してこれからもどうぞよろしくお願い致します。

風化させてはいけない0—157の苦しさ

畠山典子

「お姉さん。今、堺で大変なことが起こってるよ。テレビみて。」

と、大阪市内に住む義妹からの電話。

テレビをつけると、病院の待ち合いの椅子に横たわる大勢の子ども

達。「一体何が？」

わすれもしません。平成八年七月十三日土曜日です。

当時、我が子は小五と小一。甥っ子は小五と小四。学校は違うが私も同じブロックの小学校に勤務していて、毎日発症しないかとビクビクして過しました。

翌日は、子ども会の西ブロック大会。勤務先が会場なので、見て回ったら欠席する学校もなかったようで、教頭先生に「西ブロックは、何ともないみたいですね。」と、香気なことを言って一日を終えたことを思い出しました。

月曜日には、突然の休校。そして、夏休みへ。連日、通知表を持ち子ども達の家へ行き、体調を聞いたり、夏休みの課題を渡したりと暑期中、一軒ずつ回りました。幸いなことに、本校では発症者がなく、我が子達も無事で、ほっとひと安心していたら、初めての死亡者が出たとの報道。

ご家族の方のお気持ちを考えると、涙が出ました。仕事柄、担任の思いも理解できるので、とつてもつらいお立場だと思いました。

0—57で三人もの小さいお子さんが亡くなられてしまい、自分

の子がその側だったらと思わずにはおれませんでした。

家族も学校も、みんなが悲しい辛い思いをした0—57でした。

四十日の楽しい夏休みになるはずだった、三人の女の子。一年生の女の子は初めての休みになるはずだったのに。

発症しなかった児童もつらく長い休みになってしまいました。

私達教師は、休み中に喫食調査、検便容器やオスパン配布、子どもたちの体調を聞いたり、毎日が忙しい日々を過しました。

一体何故こんな大惨事になったのかと今考えてみると、給食の食材管理のいい加減だったこと、数か月前に他で発症していたのに、危機認識が甘すぎたことが原因だと思います。

この後の調理室の変わり方、マニュアルの厳しき、家庭科の調理実習の消毒、加熱、保存の徹底ぶりを見るとよく分かります。

私達教師も生野菜を食べていて疑問に思ったことをもつと伝えていけばよかったですと強く反省しています。

私は、この後、七月になると、クラスの子ども達にこの0—57のことを話して聞かせました。腹痛と下痢で便器に坐ってないとダメで、そこで寝ていた子がいたそうだよ。とか三人の女の子が苦しんで亡くなり、まだ後遺症に苦しんでる人がいるんだよ。

この惨事を風化させてはいけないと思いつつ語り続けましたが、退職した今も、このことを忘れることはありません。三人の女の子のご冥福を祈ります。

0-157について思うこと

(匿名)

私は0-157が発生した夏前、よく子どもを乳母車に乗せて公園に出掛けていた。堺市で学校給食を食べての出来事に驚くばかりでニュースに釘づけになってしまった。その症状の様子をニュースで知れば知るほど、恐怖心と食中毒になったお子さんや御家族の気持ちを思わずにいられなかった。学校で皆が食べる楽しい給食が思いもよらない形で危険な物となってしまったのだ。必ず安全でなければならぬし、そう今まで思い込んでいたのは私だけではないだろう。堺市のニュースはテレビなどで流れる一方、原因が何だかわからないと言う。なぜ、徹底的に調査してつきとめないのだろうかという疑問を感じた事を覚えている。このような大きな食中毒がおきているのに原因がわからないというのは、食中毒に子どもさんがなった方々の気持ちを考えると怒りたくなる。原因がわかっても亡くなった女の子がいるのだから、同じ子どもを持つ親としては深い悲しみだという事がわかる。堺市の市民の一人として何か活動しなくてはならなかったのではないかと振り返って思う。

堺市のプールが閉じられ、大きな公園では水遊びも出来ないような状況だった夏、旅行に家族で行った時、旅館に到着して受付での記入にドキドキした覚えがある。堺市と記入して宿泊を断られるのではないかと頭が浮かんた為である。幸いそのような事はなく、家族三人宿泊する事ができた。

食事は火をよく通し、生物はあまり食べないで料理に時間をかけ、子どもの体調に時に気をつけていたように思う。そのせいか、今でもお弁当に生物をなるべく入れないように心掛けている。今は、保冷剤とかがよく手に入るので良いなあと思う。子どもが小学校の頃は給食参観があり、できるだけ参加したりした。0-157が起きて、給食も安全に気を使うようになったのではないかと思う。また、これからも私達親、堺市民が気をつけて見ておくべきことなのかなあと思います。

0-157でなくなった方のご冥福をお祈りしたいと思います。また、この事をいつまでも忘れてはならないと思います。

無題

上野道子

十五年前

現在八十三才

今思うこと、甘すぎた危機認識、後手に回った行政二次感染防げず、早急に総合対策会議、首相の「注意喚起」談議も、感染しにくい体質づくり、バランスよい食事と手洗いは命を守る、家族を守る知恵、感染しにくい体質づくり、なるべく外食はしない事、病原性大腸菌の恐怖作る者も手洗いはしっかりとする事。

自分の周りの三六〇度をみつめて

野 秋 慶 子

二〇一一年にユッケ肉をレストランで食べて食中毒により何人もの人達の命がうばわれました。私の友人は生肉を食べたら、そういうリスクが高いのはあたりまえ。自分は当然食べないし、家族のみんなにも食べさせないと言いきります。彼女の職業は医者です。

リスクから遠い所にいる生活習慣はとても大切なことです。

十五年前の七月、小学校給食を食べて病原性大腸菌O157に感染し、女兒三人が死亡。九千五百を超える集団食中毒ができました。リスクから最も遠い所のはずの学校からです。この事実をしっかりと胸にきざまなければなりません。いろいろな風評も飛んでいます。その年の四月に堺市が「中核市」に昇格して従来、堺市内の保健所行政は大阪府が行っていたのが中核市への移行とともに経験豊富な医師や研究者など多くのスタッフを持つ府と切りはなされて、いきなり前例のない大きな食中毒への対応をさせられたので、後手に回った事が多々あった等。

私はふだんから命の尊さをよく口にします。命とは決して自分ひとりのものでない。自分は親から生れ、その親はおばあちゃん、(もちろんおじいちゃんも)から生れ、そのおばあちゃんはひいおばあちゃんから、ひいひいばあちゃんからとずーっと続いているものだからいただいた命を人のお役に立てるよう、又自分自身をたのしませて暮せるよう考えていこうねと。

突然に未来をうばわれた尊い命の事を、私達が語りつないでゆく事は、私達のするべき事です。自分のできる事を社会に還元してゆく事はとても大切です。自分が幸せだと思えるもののひとつに誰かの、社会の役に立っている自分自身を確認するというのがあります。今は自分の周りの三六〇度をみつめて、自分のできる何かをするという事が追悼の思いだと思っています。

無 題

高 橋 絢 子

十五年前六十才、当時弁当の食材を作る会社にいた。毎日多い日は三千本くらいのチクワを切る仕事だった。煮付けとかおでんに色々な大きさに切っていた。日頃から頭にはネットと帽子、エプロン、ゴム手袋、長くつて外からの出入りの時は手洗い、アルコール消毒はかさなかつたが、中毒が発表されたからは特にマナ板包丁など使う物すべて熱湯消毒するようになった。被害者が子どもただだけに両親はどんな思いだったろう。自分でも手洗い、熱を加えるなど注意はかさなない様になったがいつの間にかO157の事はほとんど忘れていた。自分に出来る事は家族の健康を守る事ぐらいしか出来ないがやはりいつまでも語り継いでいかなければいけないと思う。

十五年前の夏

井口幸子

あれから十五年たったのね。

当時十歳だった息子は社会人四年目。入社後、上司に呼ばれ「君は堺出身だね、〇―57は、大丈夫なの？」彼から、それを聞いた時、本人よりも母親の私がショックを受けた。まだ偏見で見られているのか。そう忘れもしない。あれは、暑い日だった。小学校の役員の人がちが汗だくになりながら一軒一軒、消毒液を配ってくれた。次男は、肺炎で、市立堺病院に入院していた。病院内は、立錐の余地もないほどで、廊下まで、ぐったりした子どもたちで異様な世界だった。何事が起こったのか、主治医も戸惑っていた。

長男の学校区域は、ひとりの発病者もなく伝染病との風評が流れ、次男は退院をすすめられ不安な気持ちで過したものだ。

結局、伝染病では無い、ベロ毒素で大腸炎症を引き起こすとわかり、原因は給食の食材から出たとの発表で、具体的なことは判らず、消化不良の形で納得させられてしまった。

幼くして生命を失った子ども、今まだ後遺症の残る人。

当時は、堺と言っただけで、ホテルをキャンセルされたり、冷たい目で見られたり、悔しい思いをした。

食の大切さを求める為、長男は管理栄養士になり、今病院で食の指導に従事している。

苦しさに身をくねって泣く力もない子どもたちの姿を、鮮明に覚え

ている。

昨今は世の中目まぐるしく変化して、堺の子どもたちの苦しさも忘れられようとしているが、この悲劇、悔しさは、次の世代に、あの夏に何があったか語り継いでいかなければと痛感する十五年目である。

無題

濱田貴蘭

十五年前の事を、思い出すと、ちょうど、長女が小学校四年生でした。当時、担任の先生が前の年任務していた久世小学校の生徒が〇―157で死亡した報告通報があつて、がっかりしました。周りの子ども親や保護者たち、大さわぎな様子で私も関心を持って聞き込みの輪に入って色々なアドバイスや情報、防ぐ心構えなどを得て感染に気を付けるよう、子どもや友人に伝えました。

今、振り返ると当時、野菜は生では食べてはいけない、肉類ほかにも多くの衛生面な、注意が非常に厳しく学校から連絡が有りました。今、大多数の人たち、十五年前発生した〇―157は忘れてしまったでしょう。忘れた恐怖はかまいませんですけど、二度目はおこさないで欲しいです。

又、亡くなったお子様方へはあの世で幸せに私たちを見守って下さい。

無題

小原礼子

も知れないと思います。

最後に、子どもを亡くされた方々に哀悼の意をささげます。

十五年前の〇—157

藤本明子

〇—157と言うと、あの当時、私は病院の厨房で働らいていて、すぐに物々しい感じで会議が始まり、マニュアルが作られました。手洗いは、これでもか…と思う程、洗って、洗って、洗ってしましたし、調理は、中心温度を計り、七十五度で二分以上、味は二の次で作っていたのを覚えています。何しろ、こうやって下さい。と言われた事は徹底的にやりました。それまでは、おいしく食べてもらおう…と思って作っていた物を、この病院からだけは、絶対に出不さないぞ…という気持ちで調理に当たったのを覚えています。そんな思いで頑張っていた私も、定年を迎え、のどもと過ぎれば…と、ちょっと前までは、生レバーも生肉も大好きで、それでも貴女は、生肉を食べますかと聞かれても、「何でも半生が一番美味しい…」なんて人前で堂々と言っていた、「後は自己責任」なんて言っていました。今日、この女性大学で、

十五年前私は五十五才でした。五人の子ども達も成長しており、又身近に被害者の方もいなかった。余り危機感がなかったように思います。今思い出してみてもその原因はカイワレ大根で一件らく着したように思います。

すしやさんに行ってもカイワレだけは食べないようにしようとか、世間の風のように流されていつしか忘れかけていました。

「まだ終わっていない、追悼のメッセージを」と言われ、よく考えて見ると、確かに〇—157は、注意さえすれば…菌が入らなければ、防げる菌であるという事を考えれば、あつてはならない事が、十五年前に起きたのだと、痛感致しました。他人事ではなく、被害者がもし私の子どもだったら…と思うと悔んでも悔みきれないだろうと思います。

〇—157は防げた病気と言う事を再認識して、二度と起こさない

今自分の子ども達が社会に出て結こんもし、それぞれ子ども達も生まれて幼稚園や小学校に行っています。その後も毎年のように鳥インフルエンザや豚肉の病原菌等の食中毒が発生しております。私達が今出来る事はまず身近なところから気をつけて、自分の体は自分で守る、家族の間でも折りにふれて話し合う。健康に気をつけるように、したいと思えます。そしていいかげんな風ちように流されないようにしっかりと国や市の行政をしっかりかんしをして二度と悲げきをくりかえさないようにしたいと思います。

〇—157は防げた病気と言う事を再認識して、二度と起こさない様、一人も犠牲者を出さない様、声を大にして身近な所から、皆に伝えて行かなければならない。それが、その時を経験した私達の役目か

貴方達が残してくれたもの

浜 脇 富 子

松 村 静 笑

十五年前の夏のことです

実家で法事がありました。

飛行機の切符の手配も終り、楽しみにしておりました。

一週間ぐらい前の事です。実家の兄から、電話がありました。「今回は、帰って来なくていい。」

何の事が、すぐに分かりました。そうか、そう言う事か。O—57のことか。私は、すごいショックを受けました。切符をキャンセルしながら、情けなくなりました。

あの頃は、何もかも、火を通し、生ものは、一切、口にしませんでした。

しかし、年日は、おそろしいものです。今では、平気で、生野菜も、おすしも食べます。

元気で可愛い、子ども達が犠牲になりました。普通に大きくなれば、もうすてきな、大人になっていたでしょう。

かわいそうで、たまりません。

大人になった、貴方達に、会いたかった。私達は、決して忘れません。

貴方達が、私達に残してくれたものは、すごく大きい。

あれから私達は、変りました。二度と、繰り返さない事を、誓います。

「のど元過ぎれば熱さ忘れる」と言われるように、あの当時のこわさは忘れてしまっています。

今振り返って考えるとニュースで地方の幼稚園で起こった。近くに下水のマンホールがあったとかで、特別心配するような事でもないと思えていました。ポツポツと他府県で起こっていたがまだ大丈夫と思っていました。ある時堺市で集団感染というニュースが報道されてびっくりしました。

当時私は大阪市の方で勤めていたので「堺は大丈夫か」とよく尋ねられました。私は当時子育ても終り近隣でもそんなうわさを聞かなかったので、あまり気にしないでいたのですが、ニュースを見た人は堺市全体で発病しているように感じているのか、と悲しくなりました。

昔には起こりえない病気ではないか。特別恐い菌でもなくどこにも有る菌のように聞くがどうしてこのような事になるのか。医学が発展して強い薬を考え出してこれが悪循環になつていような気がする。ぎせいになるのは弱者である。O—57でもゆだんがあったのではないか？もつと適切な処置を打てば、こんなに大事にならなかったのではないかと思うが、かかっている人達も一生懸命頑張つて下さっていると思う。自然の力を見くびらないように、ゆだんしないようにしなければならぬと自分自身に命じる。

伝染病に感じた事

加藤 良子

〇―57を思い出す事もなく毎日を暮しております。最初十五年前に聞く迄は知りませんでした。恥かしい事ながら自分はこの時に初めて新聞、テレビ、ニュースで知って本当に恐ろしい病原菌だと知りました。九千五百人を超える患者が出たこの事でしたが、現在はそのように過されているのか知りたく思います。私は魚のさし身は食べていますが、肉の生は食べた事はありません。

堺に新しい工場が出来た時、食堂の仕事を募集した折に、もし〇―57が発生したら、どうするのかと委員長が応募を中止されたのを思い出します。それ程、恐ろしい伝染病だと思いつく思い出しました。もう十五年も前の事とは、思われません。その時の被害者を思うとその家族の人生は如何な思いをされているのでしょうか、と自分はその被害に遭わなかったのを幸せに感じています。でもこんな病原菌を発生しないように国も気をつけて欲しいです。私はおさしみが好きですが、心配ないのでしょうか、教えて欲しく思いました。

「起こるべくして起こった人災だ」と被害者の父はおっしゃっていました。

「健康づくり推進市民会議」が常に開かれて私達も市、国に働きかけて、これからの世の中を進んで行きたく思っております。

未来に思うことは、二度と起こさない事を心がけて、常に勉強と努力を心掛けねばと思っております。

甘すぎた知識を捨て、世の中の情報を常に勉強する事を強く感じております。

又、行政もちゃんと知らせるべきだと考えております。

無題

平原 華子

今日初めて〇―57の話を知りました。

私の身近かに病の人は居ないので、私自身そんなに分からなかったですが、堺市で何じゅう人、又、何百人の人が大変な目にあつて居ると今日改めて分かりました。私にとっては、とても分かりやすく、よく分かりました。

私のこの年でよいべんきようになりました。きょうのお話を、私のお友達、又、知合いの方にも伝えようと思っております。

堺市も今後二度とこのような事のないようにと思っております。今後これからも生きてゆくことで、今日のお話をしっかり身につけて思っています。

本日は本当にありがとうございました。

十五年前のO—157について今思う事

北野 香代

本当は十五年前に起きた、「O—157」は、私の記憶の片隔にあるだけでした。今日の教養講座を聞いて、そうだあの時二人の息子も小学生で、給食を食べていたのですが、息子が通っていた学校は誰も発病しませんでした。大変な事が起きて、数日後、死亡者が出た事をテレビで知り、それから、生物は食べない、包丁・まな板は消毒する事に夢中でしたがそのうちに忘れてしまいました。私事ですが二歳年上の姉を今年なくしました。悲しみがいえない中、子どもさんを失った御両親の気持が少しわかる様な気がします。

でもこの事故の責任は誰だろうか、誰も悪くないだろうか？それに対しての明確な事は知らされてなかった様に思います。今も日本においては責任を追求しないが普通になってしまって、誰かが頭を下げて終ってしまっているの、次々と同じ様な食中毒が起る様に思われます。このような事故が起きた時、その事を忘れない事も大事ですが、私達市民が何をしなければならぬのか、まったくわかりません。誰か教えて下さいませんか。それとも私の勉強不足でしょうか。

今の私は、堺でO—157が起った事をわすれず、なくなった方のめいふくを祈るだけしか出来ません。

腸管出血性大腸菌(O—157)

集団食中毒に思う

津 阪 豊 樹

当時(平成八年)大阪市内在住の私にとって、隣接市で起きたO—157による集団食中毒は大変衝撃を受けました。

私にはその被害の拡大はもとより、事前に岡山県邑久町等で発生(予兆)があったことに対する皆の(当然私自身も含めての)取組みの甘さや無さに衝撃を感じました。

それと、原因究明が「カイワレ」一辺倒になっていたのが、不思議にも思っていました。(後に国が裁判で敗けたのであるが…)むつかしいことは知らないのですが「ハイシリッヒの法則」の考え方が、少しでもあれば事前の出来事に対して、対処できていれば、尊い命(小学生女児三人を含む多数の命)は助かっていたのでは無いかと思います。

十五年経過した今も、その原因究明がなされていないことと云い、何度も起きては繰返して犠牲者を出してしまっている状況を何とか打破していく為に、私自身も、国や行政も皆の取組みが大いに必要だと思えます。

堺市民となった今、私は私として出来る事から行動を始めて、多くの犠牲者の為にも、皆にも役に立って行けるよう頑張つて、この事に取組んで参りたいと思っています。

亡くなられた方々御遺族に心よりおきやみを申し上げます。

又、後遺症に苦しんでおられる方々にお見舞いを申し上げます。

生きる事

矢野 タツエ

十五年前突然堺市がテレビニュースで流れ、〇―157と聞きなれない言葉が毎日のように報道されました。

当時会社に勤めていて、子ども三人と母の介護等で忙しい毎日でした。しかし給食のお世話になっている子どもがいなかった事と近所や知り合いの家に感染したと言う話を聞かなかったので、最初はビツクリしただけでした。その後連日のように患者数が増え、集団食中毒の恐ろしさを思い知らされました。

その後死者が出て、何の食材かどうゆう感染経路かわからず不安の毎日でした。食中毒と言うからには、しっかりと食材・食器等、とにかく清潔に、そしてじっくりと火を通した食事にしました。

当時、幸い年老いた母、子ども達家族、知人等に悲しい結果はなく、新聞、テレビで見る患者さんや御家族の早い回復を願っていた事を思い出しました。

毎日いろいろな事件や事故があり忘れてはいけないけれど、〇―157の恐ろしさや食肉のノロウイルス等人災、行政の対策の遅さなど皆で危機管理しなければいけないと思います。亡くなられた子どもさんやその御家族の方は、十五年の年月が過ぎても心の傷は癒やされる事はないと思いますし、病院へ通った子どもさんは、心にも体にも当時の痛みがトラウマとなつて残っていると思います。自分の今をしっかりと見つめて力強く未来を歩いてほしいと願っています。今まで

の、日本の安全神話、衣・食・住に限らず、自分の身は自分で守る事を第一に考えた毎日を生きていきたいと思っています。

無題

藤田 洋子

いろいろと去来する中、十五年前、忘れ去るところだった〇―157、縁あって女性センターに通わせて頂たく中、はっきりと思い出しました。

池をはさみ、プールもお貸りしていた久世小学校の集団食中毒。身体障害者の方の給食を作らせて頂いていた私。飛び上がらんばかりに寒気を感じたのを覚えています。私達の所にも当然消毒にきました。まだ何が何だか分からず、はっきりした事も分かりませんでした。その後亡くなった児童がいると知り、信じられませんでしたが、同じ子どもの親、もし我が子なら、と、考えただけでも気が遠くなります。

御両親は、生きる限り忘れる事はないと。すぐ忘れ去る私達に警鐘を鳴らして下さる言葉に、しっかりと耳を傾

けねばならないと思います。

無念な死を遂げられた幼い命を無駄にしないよう私達は心に刻まなければなりません。

無 題

宮 田 ケイ子

十五年前、大阪市内で働いていた。朝六時五十分に家を出て、中百舌鳥から地下鉄満員電車にのり帰宅は、七時か、八時、職場と家の往復だった。日々、それでもテレビなど、「〇―57」のニュースはショックだった。

今も原因がわからないのは、なぜだろうか、改めて当時をふりかえれば、新聞の切り抜きの中から子ども達のくるしみ、恐怖、親ごさんの悲しみ、いかりが聞えて来る。

十五年前に、「〇―57」に感染した小学生がまだに苦しんでいることを知りました。

自分の中で月日が過ぎると、わすれてはいけない事を、わすれてはいけない。

日本の堺の、大切な子ども達、私達一人、一人が、大切な命を守る為に被害者のお父さまが訴えるように「〇―57」「あの夏に何があったか」、語り継いで、ほしい。私達は語り継いでいかねばならないと思いました。

そして原因を究明し、行政は全力で、食の安全、安心。子ども達、私達の健康で幸せにくらせるよう努力してほしい。

もちろん私達一人も、頑張らなければ、いけないと思います。

無 題

池 上 喜美子

その当時、私は大阪の南住吉で生活をしていました。テレビのニュースで、旧の堺市民病院が映り、実家が堺で甥が四人おり、その年頃で毎日電話で様子を、聞いていた事を思い出しました。大和川を渡るすぐの南住吉小学校に子ども達が通っていて、毎月の様に連絡プリントが配られ、大変神経を使っていました。お湯を沢山沸かし、熱湯消毒をして、気疲れした事を思い出しました。結局何が原因かわからず、私の頭の中では、政治家のパフォーマンスだけが印象深く残っています。被害に遭った方達も、そのもやもやが今になっても、気の収まる事のできない一因では、と思います。この様な大事件が起き、その後、又同じ事がくり返しおこり、時間が過ぎると忘れ、この様な勉強会であらためて深く考えさせられました。又国の安全体制が、どの様に進んでいるか、その事が一步でも前に進むことが、被害に遭われた方達への、気持だと感じます。被害者に対する差別を聞き、今震災で苦しんでいる方々と重ね合わせ、いつ自分の身におきるか、と思うと人間の身勝手に悲しい思いがします。この様なことを、考える機会を持って、これからも、この様に色々考えて、人生を一步一步、進んでいけたらと思いました。

「追悼と誓いのつどい」に平和をつないで

久保 洋子

平成八年七月十二日、まもなく夏休み。我が家では小学校四年生と六年生、二人の息子たちが思い思いの計画に胸を膨らませていた。

テレビを見てはしゃいでいた子どもたちが、「堺市で食中毒が出たっ！なんかすごいことになってる。早く見て！」と言い、家族でテレビの前に釘付けになった。病院の廊下に人が溢れていた。待合の椅子にうなだれている子、苦しそうにもがいている子、腕に抱かれて泣き叫ぶ子、走りまわっている看護師さん。患者は皆、子ども？一体、何が起こったのだろうか？言葉をなくした子どもたちが、テレビの前でおびえている。大変なことが起こっている。根拠のない不安は、翌日のニュースで予想通り更に深刻になっていった。あの時の凍りつくような思いを決して忘れることはできない。

給食が原因の食中毒だと報道された。たまたま我が子の通う学校では被害の対象になる子どもはいなかったが、両隣の学校では多くの児童が被害に遭った。被害は堺市内全域に亘っていた。もしかしたらこの子達も潜伏期間中かもしれない、明日、おなか痛いと言いつつ押ではないか。今日、罹患するのかもしれない。次から次へと不安が押し寄せ、冷静な気持ちを保てないようになっていた。強い感染力を防止するために各家庭に消毒液が配布され、執拗に子どもを追いかけて回して手洗いや消毒を確認した。食事の用意にいつもの三倍程の時間をかけた。夏休みになっても人と交わる場所に出向かないようにと勧告

され、近所でも子どもの姿を見ることはなかった。また、全国各地からは、堺からの来訪を断られたりもした。感染しなかった子どもたちにもその家族にとっても、決して忘れることのできない辛い日々となり、その被害は八十万市民全員を巻き込む未曾有な事態となった。

今なお、胸を締め付けるのは、元気に給食を食べて尊い命を落とした三人もの子どもたちのこと。私の子どもは、今年から社会人になった。今までも、卒業や進学など、その度に親としての嬉しい気持ちの傍らに、いつも手放して喜べないもう一つの気持ちがあった。それは、あの日、我が子と同じ給食を食べて、亡くなられた子どもやご家族のこと。こみ上げる空しさや憤り。同じ時代に生まれ、同じ時代を生きていくはずだった子どもたちの命の尊さ。自分に何ができるのかというつも考えさせられた。

また、重傷者を初め九五二三名もが罹患し、その家族、職場、地域など堺市民八十万人の日常生活が非常事態となった夏を過ごした。このことを、決して忘れてはならないと思った。

また、子どもたちに「給食を残さず食べなさい」と言えない教育があつてはならないと思った。そんな気持ちの中で市民団体が中心となって堺市健康づくり市民会議が発足された。いち早く「〇―57追悼と誓いのつどい」が開催され、私のやり場のない憤りや不安や犠牲になった方たちへの祈りを受け止めてくれた。そして、あれから十六年目を迎えるが、欠かさずに参加をしてきた。嬉しいことに、今年、ようやく記念日が設定されることが決定した。その陰には、決して風化させはならないと、市民会議の皆さんが祈る思いで繋いできた十五年と会議に参画する皆さんの揺るがない信念があったからこそ心から感

謝したい。

これからも変わらない「追悼と誓い」を、平和への祈りと共に、私たち市民一人一人が堺市の未来のために繋げていかなければならないと痛感している。震災や震災に伴う二次被害により、危機管理の重要性が必然とされるが、堺市が「安全で安心なまちづくり」を推進する為に欠かせない大原点であると思う。

最後に、01157を始め、テロや戦争、天災によって犠牲になられた方々のご冥福を心からお祈りすると共に、教訓を活かして、命を大切にすることを誓いたいと思います。

大切なあなたを忘れない

堺市健康づくり推進市民会議

副会長 山口典子

あの夏のこと

平成八年七月十二日に堺市で発生した、世界でも未曾有の食中毒事件、〇―57学童集団下痢症。九千五百二十三人の罹患者のうち三人の少女の尊い生命が奪われました。小学校一年生、五年生、六年生。あの夏ことは、私には生涯忘れることはできません。

当時私の娘は二歳でした。アトピー性皮膚炎とあせもに悩まされており、忙しい私は夏休みわずか一泊で白浜に。海水浴をすれば娘の肌が、少しはましになるかもしれない、と考え連れて行ったのです。海で娘と砂遊びをしていると、空から「おばちゃん、わたしはなんで、海であそべないの?」という声が聞こえてくるではありませんか。

私の心の中には、学校の給食を食べて亡くなってしまった二人の少女への思いがあり、自分の娘を海水浴に連れてきていることにどこか後ろめたさを感じるほど、辛かったです。

堺市健康づくり推進市民会議の結成

その後堺市では三師会からの呼びかけで堺市健康づくり推進市民会議が構成団体二十一団体によって結成されました。私は女性団体の事務局長でしたが、その会に参加することになりました。第一回の会合の時、市民会議の設立趣意書の中に、「〇―57」という言葉が全く

見つかりませんでした。

私は驚いて、意見を申し上げました。「単なる健康づくり会議など意味がない、『〇―57』を故意に隠すのか?」

この事件を契機に作られた組織、この事件に触れずに設立の意味などありません」と。

強い意見は私以外に医師会等からも出されました。結果、市民会議はあくまで〇―57学童集団下痢症を契機に結成された趣旨をきちんと盛り込むことになったのです。

ご遺族をたずねて

事件後二年目の市民会議で、追悼と誓いのつどいを毎年開催しよう、ということになった時、平成十年だったと思いますが、夏に、ご遺族のところへ役員の数人で伺いました。

お一人は小学校六年生の少女のお父様。泉が丘の市民センターでお会いしました。「市民の皆様方の、そういう思いはありがたい」とおっしゃって下さいました。

もうお一人は、すでに堺市外に転居されておりましたが、そこまで伺いました。お宅を訪問し、お仏壇に手を合わせました。小学校一年生の少女のお宅です。書初めのお習字、バレエの発表会写真やかわいらしい小さなピンクサテンのトゥシューズなどの思い出の品々が、お部屋中に飾られていました。

お仏壇の横には、たくさんのおぬいぐるみや、お菓子が山のように置かれていました。

私たちが訪問させていただいたとき、教育委員会の男性職員が一人、

お仏壇の前であぐらをかいて座っていました。私は、彼の姿にカッとしました。

あぐらをかくなら、仏壇の前から離れなさいと。こんな無神経な態度でご遺族の家に居て何の話ができるのだろう、と腹が立ちました。

そのときお宅には、お母様しかおられず、お父様のお帰りを待っているとのことでした。見るからに憔悴しきっておられるお母様が、市民会議について尋ねられました。市民会議の構成団体に堺市医師会とあるが、この医師会には市立堺病院の医師も含まれているのかと。私たちの答えとしては、含まれている方もいますが、大半は、堺市内の開業医の医師が多いということを説明しました。なぜそんなことを、お聞きになるのですかときくと、「うちの娘が、母子医療センターに入院して意識不明であった時、急に市立堺病院の医師が病室に入ってきて、『うわっ、すごいなあ』と言ったんです。その言い方が忘れられません。娘の体にはいっばい点滴などの管が装着されていて大変だったんですが、あの医師のあの声と言葉はあまりにもひどいものでした。」涙ながらにそう話してくださいましたお母さまにとって、堺市医師会の中にそのドクターがいるならば、許せないと思われたのかもしれませんが。そのあと、私たちは「追悼と誓いのつどい」を開催させていただいていかどうかお尋ねしました。

「今となつては、この事件を忘れてはしくない。せめてそれだけ。だから追悼式はありがたいです。でも私たちは、今、堺市の人たちの顔を見たくありませんので出席できません。でもありがたいです。」とおっしゃって下さいました。伺った役員さんも私も、みんなでお母様と一緒に泣きました。

もうお一人のご遺族は、その日はお留守でお会いできませんでしたが、行政の方から伝えていただくと、追悼式についてはご了承をいただいた、ということでした。

森本茂樹さんの死と第一回 追悼と誓いのつどい

三ご遺族のご意向を確認したうえで、追悼と誓いのつどいを開催することとなりました。市民会館の大ホールでした。基本的な式の進行や、舞台をどうするかなどの原案は私が市民会議の企画委員として考え、市民会議で合意を得ました。当日までの準備も、当日の会場づくりも、堺市健康づくり推進市民会議の構成団体の方々のボランティアと堺市の健康福祉部の職員や市教委の職員の方々とて準備をしました。舞台は、三人の少女のためにかわいらしい花々で埋め、学校の椅子を三脚並べました。追悼と誓いのつどいの舞台や準備が整った後、開式の前に、関係者みんなで舞台上がり、亡くなられた三人の少女と、もともと堺市教育委員会の総務部長で、退職後、事件当時には財団法人堺市学校給食協会の常務理事であった森本茂樹さんのご冥福を祈り、黙とうをしました。

森本さんは、〇―57学童集団下痢症の発生後の九十六年十一月二日、午後二時四十五分ごろ、堺市深井水池町のため池、水質池で自殺を図っておられるのが発見されました。新聞報道によれば、警察の調査によって、森本さんの自宅から妻様などにあてられた、遺書が残されており、「すまない」、「本当にすまない」、「残念だ」というようなことが残されていたそうです。

温厚で責任感の強い森本さんが、この事件後、責任を感じて自殺さ

れたことも大変に重いことでありました。私は森本さんの死も無駄にしてはならないと決意していました。十一月二日は、給食再開を決定した日でありました。

今から思えば、もしかしたら森本さんは、事件の責任を感じられたと同時に、当時の早すぎる給食再開や、市長の十一月一日の安全宣言に身をもって抗議されたのかもしれない。勝手な推測は許されませんが、森本さんのお人柄や仕事への責任感を思うと、私にはそんな風を感じられたのです。

三人のご遺族が、当時の市長や堺市職員の人々の顔を見たくない、なぜなら、堺市がこの事件の原因や責任について明らかにしていないから、という同じような理由で、追悼と誓いのつどいにはご出席いただけませんでした。市民の皆さんからの献花をつどいの終了後に堺市の職員さんがお届けすると、受け取っていただけたようです。たくさんのお花は、亡くなった三人の少女が通っていたそれぞれの学校にも届けられ、堺市役所本庁の玄関にも飾られ、多くの職員や市民の皆様とも追悼の思いを共有していただきました。

娘が枕元に立つんです

当時、小学校六年生だったAさんの娘さんは、O―157に感染し、一か月間の危篤状態のち、悔しくも尊い命を奪われてしまいました。Aさんの一人娘でいらっしやいました。デザイナーになるのが夢だったそうです。

その前に追悼と誓いのつどいのお花を届けたことがあり、どんなをも、ご自宅には入らせないようになさっている、とお伺いしてい

ましたので、玄関先でお話しをさせていただいたことがありました。

その時、玄関口に出ていただいたお父様の背後に、お仏壇が見えました。寒い日でした。お仏壇の前に小さな真つ白な陶器のお骨壺が置かれていました。あまりにも寒い季節でしたので、私は家に帰って、お骨壺のカバーとお座布団を毛糸で編んでもらい、また二日後にそれをAさんのご自宅まで届けました。お留守でしたので、玄関のドアノブにお骨壺用の毛糸のカバーと座ぶとんの入った袋を自分のハンカチにくるんで、お手紙を入れて取り付けておきました。すると翌日、Aさんからお電話をいただき、「ありがとうございます。ハンカチをお返しに行きます。」とおっしゃって、その日の午後女性センターでお会いしました。

すでにその頃、さまざまな問題でAさんは、堺市に対し抗議をされておりました。二人きりでお話をさせていただきました。なぜAさんが、大切な娘さんを奪われて、さらにこれほど傷ついておられるのか、よくわかりました。涙なしにはお話は聞けませんでした。

事件から一年後、事件の年には自粛されていたAさんの地元の校区まつりに行かれたところ、そこに当時の市長一行が来られた。そのとき自分はずっと入口の所に立っていたけれども、市長も随行の職員も誰も自分に気づかなかったと。それまでなんともAさんのところに謝りに来ていた人々がAさんの顔すら覚えていなかったと、おっしゃいました。「山口さん、寝ても覚めても娘が枕元に立つんです。なんとかしてくれと立つんです」とAさんはお話の中で何度もおっしゃいました。二人で一緒に泣きました。Aさんはとても穏やかで、ときには優しい笑顔もみせてくださっていました。Aさんとその日お別れした

ときに、夕焼けがとてもきれいだったことを覚えています。

それから

その後、T教育次長が私のところに来られて、「これからご遺族との交渉は教育委員会がやりますので」とのことでした。私は、小学校一年生の娘さんをなくされたBさんのお宅での、あの職員のお話をかいている姿を思い出していました。それからというものの、案じたところ、私たちとの話の時には市民会議のシンボルマークについてもご了解くださっていたAさんが、シンボルマークや、慰霊碑などのごく抗議をなさるようになっていました。

Aさんに限らず、堺市の職員が「来るな」といわれてそのままご遺族や被害者のお宅を訪ねていなくなったりしていると聞いた時には、それでも行くべきだと私は申し上げてきました。私が議員になって間もなく、担当の職員がやってきて「今年も追悼と誓いのつどいをやるんですか？」と尋ねられたり、ある教育長などはAさんが裁判が終わった後にも苦情をおっしゃっておられることに関して「タックスペイヤー（納税者）の公平性から、これ以上Aさんのおっしゃることは答えられない」などとおっしゃいました。

私は、この二件については激怒しました。声を荒げて抗議をしました。

「二度と言わないでくれ。言うなら私の前に姿を見せないでくれ」と。

おもえば、この間、戦いの連続でした。私が、堺市の職員や特別職の人たちによく言ったのは、「もしも、あなたのお子さんが学校給食を食べて亡くなってしまうたら、親として気が狂ったようになるのは

当たり前でしょう。その怒りや悲しみをどんな形でぶつけられても、誠意をもって受け止めていくのが堺市の責任というものです。なんと、いうことをいうのか」と。こんなに長い間、十六年間も話をこじらせ、ご遺族や被害者ご本人やご家族との補償交渉すら終わっていない、というのは堺市や教育委員会に任せていた（わけではないのですが）自身が悔やまれました。私ですら、被害者ではないのにずいぶん傷つきました。

心ない他の議員が、中途半端にかかわってご遺族との話を混乱させたり、市民会議の在り様を非難したりする議員もいました。Aさんとの関わりがあるというので、Aさんに確認したら、「一方的にある議員から電話がありました。が、いっさい関わりはありません。何かを依頼したこともありませんが、あんな議員は信用できません。」とおっしゃっていたのを覚えています。

ただ、私が慎重にしたのは、ご遺族や被害者の心をこれ以上傷つけないために公の場所ではよほどのことがない限り、発言を控えてきました。しかし、追悼と誓いのつどいについては、たとえAさんやどなたが反対意見をおっしゃろうと、これだけは純粋な市民の気持ちとして続けることを決めていました。幸いにも市民会議の、特に会長職である、堺市医師会の岡島先生や樋上先生は同じ思いで活動してくださっていました。もちろん薬剤師会など他の団体も、この問題の時間がかかりすぎていることと、亡くなった子どもさんや被害者の方々への思いと、堺市への腹立ちは同じでした。

平成十年から毎年続けてきた追悼と誓いのつどい。毎回心を込めて開催してきました。実働部隊の中心は堺市女性団体のメンバーでした。

加害者の立場だから、主催できないといい続ける堺市との根くらべてした。市民会議としては、当然堺市が主催してつどいを開催すべきだと考えていました。堺市が政令指定都市に昇格することが決まった年、つまり政令指定都市になる前年の追悼と誓いのつどいの前日。当時の教育長が直接私に「堺市が政令指定都市になったら、追悼と誓いのつどいは堺市が主催してやります。それは市長も了解しています。」とおっしゃいました。はっきりおっしゃったので、そのことを市民会議の会長はじめ構成団体の皆様に伝えました。そして当日の閉会のあいさつでそのことを公表することになりました。その年の閉会のあいさつは私が担当することになっていましたので、「来年、堺市が政令指定都市になれば、堺市が主催してこのつどいを開催されるということを教育長から聞きました。市長もご了承されているそうです。堺市が主催することになって私たち市民会議は、これまで通りの気持ちでつどいに協力し参加していきます」と申し上げました。毎回、この追悼と誓いのつどいには多くのマスコミが来られています。当然、いい加減な話はできません。

翌年、堺市が旧美原町との合併を経て、政令指定都市になることができました。教育長は、副市長になりました。しかし政令指定都市になっても一向に堺市が主催する「追悼と誓いのつどい」の話が聞こえてきません。当局との話し合いでも、口をつくむばかりで話が分かりません。当該の副市長が私の選挙事務所にやってきて、頭を下げています。やむをえず、また市民会議が主催でつどいを開催することになりました。その年度も終わりの三月のことでした。それ以来、市長は市民会議の「追悼と誓いのつどい」に一切出席しなくなりました。

堺市のトップがこの程度の責任感では、〇―57が解決するはずもありません。私たち市民会議が主催する「追悼と誓いのつどい」について歴代の市長や教育長は、職員に参加を呼びかけたのでしょうか。

堺市役所の市民広場で夕方から開催したときすら、退庁する職員の間が、見て見ぬふりをしてさっさと通り過ぎていきました。自分たちの問題としてとらえていないのです。しようと思えばこんなことを公の場で明らかにすることもできました。でもわたしはできなかった。断片的にこんなことが遺族や被害にあわれた方々に伝わってしまったら、またもつと傷つけてしまうと思い、そんなことは私にはどうしてもできませんでした。しかしその分、堺市や教育委員会には「〇―57の問題になると山口は異様になる」と言われるほど強く抗議をしてきました。何と言われても結構でした。

わたしは一昨年(二〇一〇)から議会ではっきりと質問することになりました。「〇―57の質問をするんですか」と教育委員会のある方から言われました。「します。」

それまで、おかしいおかしいと思っていました。担当の職員の話がつかじつまが合わない。議会で尋ねました。この十年間のご遺族との接触は何回あるのか、と。その回数は、交渉してきたといえる回数ではなく、しかも担当者が一人で行っていました。多くても二人で。堺市のトップは彼にまかせっきりだったといえます。こんな重大なことを、彼がいかに誠実で能力があるとしても、まかせっきりでよいはずがありません。

以上のように、振り返ってみただけでも私ですら、ここには書けないような心ない言動や、考えられないような「仕打ち」を受けてきまし

た。本当に傷つきました。けれど私の傷など、亡くなった三人の、いい言葉はきついかもしれませんが、給食によって殺されてしまった三人の少女の思いやご遺族の思い、また被害にあわれた方々の思いに比べたら、どうということはないと、自分を奮い立たせて今日まで来ました。

「〇―57学童集団下痢症を忘れない日」(仮称)制定に

けれど、もう私たちや市民会議の構成メンバーを揺るがすことはできません。

昨年の九月議会で、「〇―57学童集団下痢症を忘れない日」(仮称)の制定を提案しました。もともとこの提案は、〇―57の問題に心を痛めている一人の青年からの提案でした。今年二月二十八日の私の本会議の大綱質疑において、再度質問したところ、「〇―57学童集団下痢症を忘れない日」(仮称)の制定をする、という教育次長からの答弁を獲得しました。さらに「追悼と誓いのつどい」についても今後は堺市が主催し、教育委員会が行っていた学校安全の日にはしない、さらに市民の皆様との共同で開催していくと答弁をいただきました。ささやかであり、遅きに過ぎる決断ですが、それでも小さな前進であることにまちがいはないと思います。

大切なあなたを忘れない

亡くなられた三人の少女も、被害にあわれて今なお苦しんでおられる方々も、みんなとても健康な子どもさんでした。「堺市健康づくり推進市民会議」という、あたかも健康であれば〇―57に感染しな

かったと受けとめられるような団体名も、いかがなものかという議論をしながら活動してきました。学校給食を食べて、命が奪われるというあつてはならない食中毒事件。この問題の解決とはなんでしょう。本場の解決は、三人の少女が生きて元通りの元気なかわいらしい姿で戻ってきてくれること。被害にあわれた方々のお身体と心が元通りの健康に戻れることです。でも失われた命は二度と戻らない。ならば私たちになにができるか。二度と食中毒を発生させない？

そんなことは当たり前で、亡くなった三人の少女の人生と被害にあわれた方々への何の慰めにも、償いにもなりません。

彼女たちを忘れないこと。堺市も教育委員会も市民もみんなが決して忘れないこと。誠意をもってともに背負い続けること、だと思います。

今、中学校の給食の導入が言われています。もちろんさまざま観点から、法的観点からみても給食を導入することに越したことはありません。でも私は思うのです。あの事件の時、堺の小学校の給食も、やめるべきだと。再開するならば、調理場や調理方法などの安全性を検討するだけではなく、もっと保護者と給食についてきちんと話し合う必要があったと考えています。なぜなら、〇―57学童集団下痢症は、明らかな人災だからです。今後どんなに注意をしても、人間が行う限り「絶対」はありません。このことが他人事と化してしまったら、その時にはまた尊い生命と人生が奪われます。私はそう思っています。だからこそ、今私たちができることは追悼と誓いのつどいを未来永劫続けていくこと、堺市は、この悲劇を二度と起こさないための

条例も制定することが必要だと考えています。

Aさんの娘さん、Bさんの娘さん、Cさんの娘さん私は彼女らのご命日を忘れたことがあります。お名前も。ずっと私の心のなかで生き続けてくれましたから。生きていてくれたら、二十八歳、二十七歳、二十三歳くらいでしょうか。そんなことを自分の娘を見るたびに思う、切ないです。そして今もなお後遺症に苦しんでおられる方々に、どうか十分な治療と手当てがなされることをと注目し続けています。

堺市の幹部や職員の方々の中にも心ある人はいます。その人たちとやってきたのです。ご遺族や被害者の方々にとれば、誠意の足りなさ、言葉の不適切さ、思いの足りなさ、いろいろそのことによって、傷を深めてしまい、信頼関係が失われてしまったと思います。硬直化してしまった関係性の責任はすべてこちらにあります。許されるはずもないことです。

でもわたしたちは、大切な彼女たちを決して忘れません。そのことだけをお伝えしたくて書きました。私には、最初にお会いした、あの日のお父様やお母様のお顔とお言葉がすべてです。そして心の中の三人の女の子たちの声が支えます。

長い間、本当に申し訳ありません。まだまだこれからです、本当にごめんなさい。

「堺市0-157学童集団下痢症 追悼と誓いのつどい」について

堺市健康づくり推進市民会議は、堺市0-157学童集団下痢症により亡くなられた児童を追悼し、二度と繰り返さないことを誓うとともに、事件を風化させず危機管理意識を高めることを目的に、平成10年度から平成17年度まで「堺市0-157学童集団下痢症 追悼の誓いとつどい」を開催してきました。

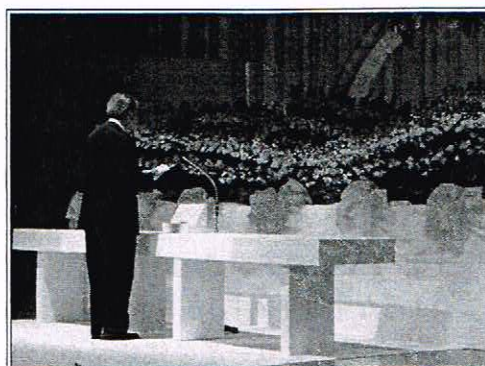
平成18年度からは、堺市健康づくり推進市民会議の有志により、平成21年度を除き毎年「追悼と誓い市民のつどい」として開催されています。

開催趣旨

平成8年7月の0-157学童集団下痢症は、9,523人も被害者を出すとともに三人の少女が亡くなるという、あってはならない食中毒事件として堺の歴史に大きな傷跡を残しました。私たちは堺市民として、また人間として亡くなられた尊い命に思いを馳せ、ご遺族や被害にあわれた方々とともに手を携えて生き、全ての市民の安全と健康を願います。そして、二度とこのような悲劇を起こさないよう私たちは市民の手づくりの「追悼と誓い 市民のつどい」を開催します。

堺市0-157追悼と誓いのつどい (追悼と誓い市民のつどい)の歩み

- | | | |
|-------------|----|------------|
| 平成10年11月28日 | 献花 | 追悼演奏 |
| 平成11年11月27日 | 献花 | 追悼のことばなど |
| 平成12年11月30日 | 献花 | 追悼のことばなど |
| 平成13年11月30日 | 献花 | 追悼演奏 |
| 平成14年11月29日 | 献花 | 追悼演奏 |
| 平成15年11月28日 | 献花 | 追悼演奏 |
| 平成16年11月26日 | 献花 | 追悼演奏 |
| 平成17年11月25日 | 献花 | 追悼演奏 |
| 平成19年3月1日 | 献花 | 追悼独唱、ことばなど |
| 平成20年3月17日 | 献花 | 追悼演奏 |
| 平成21年2月16日 | 献花 | 追悼合唱・演奏 |
| 平成22年11月30日 | 献花 | 追悼演奏・合唱 |
| 平成24年3月13日 | 献花 | 追悼演奏・合唱 |



堺市O-157学童集団下痢症事件

平成8年7月12日(金)に市立堺病院の夜間診療において小学校の児童が下痢、血便を主とした症状によって受診したと、翌日の7月13日(土)に市立堺病院から堺市環境保健局衛生部(現健康福祉局健康部)に報告され、直ちに学童の集団食中毒と疑われました。そして状況調査が行われると同時に学童集団下痢症対策本部が設置され、その後の状況把握から、激しい腹痛や下痢、血便を訴える児童が急増し、7月13日(土)の夜から14日(日)にかけて堺市内の病院、診療所、急病診療センターに二千数百人もの患者が受診するという状況になりました。

有症者検便26検体のうち13検体から腸管出血性大腸菌O-157が検出され、学童集団下痢症の原因菌と断定されました。この原因菌による学童集団下痢症は学校給食による罹患が確実であると判断され、患者数は学童が7,892人、教職員が74人、家族や一般市民などの二次感染者が1,557人と大多数の被害者を出すとともに、3人の学童の生命を失うという未曾有の事態となりました。このような大規模食中毒の発生に対して、厚生省(現厚生労働省)、大阪府、堺市は原因を究明するため、プロジェクトチームによる徹底的な調査等を行いました。原因食材は特定されず、発生の経緯は明らかになりませんでした。堺市は、新たな患者の発生や二次感染の危険がなくなった平成8年11月1日に安全宣言を行い、同年11月19日から学校給食を再開する一方で、このような悲惨な事故を二度と繰り返さないため「学校給食検討委員会」と学識経験者で構成する「学校給食懇話会」を設置し、専門的な立場から「21世紀を展望するこれからの堺市学校給食のあり方」について意見を求め、その提言を受けて「堺市学校給食基本方針」を定めました。また、学童集団下痢症の反省に立ち、市民参加による健康づくりを推進することとし、平成9年4月「堺市健康づくり推進庁内連絡会」が設置されるとともに、医師会、歯科医師会、薬剤師会の呼びかけによって市内22の各種団体で構成される「堺市健康づくり推進市民会議」が設立されました。同市民会議では、健康づくりに関する様々な事業を行うほか、事件の風化をさせることなく教訓として活かしていくため、「O-157学童集団下痢症 追悼と誓いのつどい」を開催してきました。

このような中で平成10年3月、堺市議会において「健康都市宣言に関する決議」が議決され、「健康都市・堺」が宣言され、より一層の健康づくりが推進されるようになりました。また、この事件を教訓として食中毒及び感染症による危機事象に対処するため、健康危機管理マニュアルも策定されました。

堺市O-157学童集団下痢症をもたらした腸管出血性大腸菌O-157

大腸菌は健康な人や牛などの動物の腸管の中に常に存在している細菌で、腸の中にいるかぎりは病気を起こすことのない無害な菌の一種です。しかし中には下痢、腹痛といった腸炎症状をおこす特殊な大腸菌があり、性質や、起こる症状から5種類のものに分けられ、O-157はこの中の腸管出血性大腸菌に分類されます。1982年アメリカのオレゴン州とミシガン州で起きたハンバーガー食中毒事件について、患者の症状がそれまでになく血便を見ることが多く、しかもほとんど血液ばかりといった血便であったため、これまでの菌と性質が異なるのではと疑われました。細菌学的な検査の結果、菌成分の免疫血清学的な反応により分類されるO型と、鞭毛成分の反応から分類するH型によって組み合わせられたO-157:H7であることがわかりました。

この菌は、ペロ毒素という赤痢菌が持つ毒素と似た2種の毒素を産生することも分かり、ペロ毒素産生性大腸菌とも呼ばれています。また、毒素を産生する性質は重大な意味を持つもので、出血性腸炎という症状のみならず腸炎症状のおさまった約1週間後に、溶血性尿毒症症候群(HUS)という重篤な病気を起こすことがあるということも分かり、ペロ毒素が腸管から体内に入って、血液を通じて腎臓や脳など体の随所の組織へ運ばれたのち、腎不全や中枢神経症状など致命的な病状を起こすとされています。

現在は、この病状を有効におさえる治療法は見つかっておらず、通常の食中毒と比べて、O-157は少数の菌で経口感染することが知られています。また、ペロ毒素産生性大腸菌はO-157による感染の頻度が最も高いといわれています。

大阪大学微生物病研究所細菌感染分野
山本耕一朗 助教授 提供

「堺市0-157学童集団下痢症」発生からの経過

年	月	日	出来事	市・府・国の動き	医療機関等の動き
1996(平成8年)	7月	12日 (金) 夜間	小学校の児童が多数下痢・血便の症状で受診。		
		13日 (土)		堺市学童集団下痢症対策本部を設置(本部長 環境保健局長)。	市立堺病院から環境保健局(当時)に患者10名を診察しと通報。 堺市医師会 対策本部を設置 宿院急病診療センターで終夜対応。
		14日 (日)		助役を堺市学童集団下痢症対策本部長とし、対策本部を強化。 「腸管出血性大腸菌O157が13検体から検出」と発表。原因をO157と断定。	市内の病院、診療所、急病診療センターで二千数百名が受診。救急用ベッドが満床となる 大阪救急病院にも応援を要請。午前1時より対応してもらった。 大阪府救急医療情報センターに入院ベッドの確保を依頼。大阪市内、大阪北部、大阪東部に十一病院(43床)を確保。 近大病院、午後1時より対応開始。 府立母子総合保健医療センター、午後3時より対応開始。 堺市及び近隣病院が満員となる。大阪府救急情報センター、大阪市中東急病センターに二次後送を依頼。 大阪市内の市長病院、市大病院等の受け入れ確保。 清見会病院、堺温心会病院、ベルランド総合病院他小児科救急センターが外来、入院に対応。
		15日 (月)	患者数2,963人	担任教師等による家庭訪問の開始。 各小学校、養護学校を休校とする。 奥田幹生文部大臣(当時)が入院児童をお見舞い(市立堺病院) 緊急議員総会	市立堺病院、大阪労災病院、国立東北病院、府立母子総合保健医療センター、国立大阪南病院及び国立大阪病院にて夜間外来開始。
		16日 (火)	患者数(概数)4,088人(内、入院218人)	市長を学童集団下痢症対策本部長とし、全市をあげて対策に取り組む。 菅直人厚生大臣(当時)が堺市を視察する。	二次感染予防のためのパンフレットを作成。医療機関で市民に配布。 治療マニュアルを全医療機関に配布。 入院者の喫食調査開始。
		17日 (水)	患者数4,334人	原因究明及び保健予防プロジェクトチームを設置	堺市医師会O157集団学童下痢症対策本部会議開催。
		18日 (木)	患者数5,200人超		患者向けの二次感染予防と、食中毒防止の3原則、正しい手洗い方法等のパンフレット作成。各医療機関にて配布。
		19日 (金)			児童の喫食調査開始。

堺市健康づくり推進市民会議について

平成8年7月の堺市における病原性大腸菌O-157による集団下痢症の反省に立ち、平成9年度を「健康都市づくり元年」と位置付け、市民総参加の健康づくり運動の展開を目的として、市民自らの健康づくりをさらに推進するため、市内各界の団体をもって、平成9年4月28日に設立しました。

その後、人権を尊重し、安全で快適に生活できる「健康都市・堺」をめざして、健康づくり啓発活動、健康づくり講演会、健康フェアなど各種健康づくり推進事業を展開しています。

堺市健康づくり推進市民会議 構成団体

(平成24年3月現在)

社団法人 堺市医師会
社団法人 堺市歯科医師会
社団法人 堺市薬剤師会
堺市食品衛生協会
堺市自治連合協議会
堺市女性団体協議会
社団法人 堺高石青年会議所
社会福祉法人 堺市社会福祉協議会
一般社団法人 堺市老人クラブ連合会
特定非営利活動法人 堺障害者団体連合会
一般財団法人 堺市母子寡婦福祉会
堺商工会議所
堺市商店連合会
堺市市場連合会
連合大阪大阪南地域協議会・堺地区協議会
堺市農業協同組合
堺市漁業協同組合連合会
堺市PTA協議会
堺市健康づくり食生活改善推進協議会
堺市こども会育成協議会
堺体育協会

(順不同)

健康都市宣言

宣 言

～健康都市・堺をめざして～

健康に生きることは、市民すべての願いです。

そのため自らが心とからだの健康づくりに努めるとともに、
健やかに安心して暮らせる良い環境とまちづくりをめざします。

平成10年第2回市議会において、健康都市宣言に関する
決議が全会一致で可決されたことに基づき、市民一人ひとりが
健やかでいきいきと暮らせるまちをめざし、ここに私たちは
「健康都市・堺」を宣言します。

平成10年3月25日

大阪府堺市

この宣言は、市民の健康づくりと福祉の充実を図り、また、生活環境の
安全確保に努め、市民が健康で生きがいをもって暮らせるまちを築くこと
を基本理念としており、市議会が平成10年2月定例会で「健康都市宣言
に関する決議」を全会一致で決議したことを受けて行ったものです。

堺市0-157学童集団下痢症追悼文集

平成24年3月 発行

編集・発行 堺市健康づくり推進市民会議

〒590-0078 堺市堺区南瓦町3番1号

堺市健康福祉局健康部健康医療推進課内

TEL 072-222-9936

FAX 072-228-7943